

# 月報を読む：序論

(Browsing Inserted Leaflets: An Introductory Essay)

藤 井 哲\*

## 概要

全集や叢書類にしばしば挿み込まれる「月報」は、本体が毎月刊行されるには限らないので、付(附)録、通信、研究、葉などと呼ばれたりもする。広告を兼ねていて綴じられることも少ないので、図書館でも持て余してきたようである。「月報」という概念にしても、国会図書館は『全集月報・付録類目録』を刊行した 1996 年に“Explanatory Inserts for Serial Publications”と説明的に英訳せざるを得なかった。英語圏には新刊案内 (insertions, clips, leaflets) はあっても、学術性を潜ませているが読み捨てられそうな記事を読者サービスとして挿み込むという発想が無いからである。本稿では、読んで面白いが ISBN も ISSN も振られないこの小冊子の可能性や活用法について考察してみたい。

## 月報は面白い

鷗外研究者の大屋幸世が残した『蒐書日誌』(皓星社、2001～03) という 4 巻本を読んでいたら、その第 3 巻に次の一節があった…

---

\* 福岡大学名誉教授

しかし月報は楽しい。書く人が片肘張っていないのでこちらも気楽に読むことができる。文学者の風貌姿勢を髣髴させるところがある。(p. 333)

まったくもって、その通りなのだ。気楽が一番と日頃から横着を決め込んできた筆者（藤井）としては、文学作品や文筆家に関心を覚えても正面から作品研究や作家論に取り組む実直さには大いに欠けるところがある。どちらかといえば、先ず月報辺りをめくってみたいくなる。広告紛いで、紙質の劣る印刷物から醸される寛いだ路地裏の雰囲気、着流しで徘徊する文人が垣間見えたりして、作品にまつわる内輪話を拾えそうに思えてくるからである。

例えば、『井伏鱒二全集』（筑摩書房、1964～75）の月報を開くと、「井伏さんから聞いたこと」が然りげ無く連載されている。執筆者の伴俊彦は『文芸朝日』の編集長で井伏の著作を全点揃えている熱烈なファンらしい。それは、井伏が自著の一点一点についての執筆動機をざっくばらんな口調で語った12回の聞き書き集で、アカデミックな解題類には見掛けそうもないインフォーマルにしてインフォーマティブな発言を記録した百数十枚であった。井伏文学への恰好な導入になると思うが、伴は著書をほとんど残さなかったので転載はされなかったであろう。こうした掘り出し物を潜ませている「福袋」として、筆者（藤井）は月報に期待を寄せるのである。

裏口から首を突っ込んで内部情報を漁る覗き見根性では、予断と偏見に惑わされかねず、作品や人物への取り組み様としては邪道かも知れない。研究者なら正面玄関から堂々とアプローチすべきであろう。しかし一般の文学愛好者に対しては興味本位に月報を読み散らす行儀の悪さも大目に見られて良からうとの思い入れもあって、筆者は本稿において月報の面白さを、更には月報の厄介さを強調しながら、アピールしてみることにした。

筆者の月報への期待感を代弁する人物は（少しも意外ではないが）大屋の他に幾人もいる。近代文学研究で知られた保昌正夫が『横光利一全集月報集成』（河

出書房新社, 1988) の「編集ノート」で開陳しているには…

全集の見どころの一つは、はさみこみの月報に在る。一つの、どころではない。分厚い一冊の中味はさておいて、まずは附録の月報から読み始めるという人も少なくないだろう。その文學全集の月報には作家にまつわる回想あり、エピソードあり、収録作品の鑑賞、評価ありで、書き手の筆致がその人の姿勢を直截にあらわしており、あらためて月報文章という世界があることを傳えてくる。…時期をへだてて幾度か刊行されている場合には、その都度、その時期のその作家、その仕事の受けとめ様が月報集成を繰ることで、おのずとあらわれることになる。その作家の評価史、需要誌といった意味も、そこに備わるのである。(p. 420)

ある程度このような認識が読書人の間に共有されてきたからこそ、二つ折りにしただけの質素な雑文集が、本体に綴じられず挿み込まれただけなのに、一世紀にわたって日本の出版社や読者に受け入れられてきたのであろう。

こうした慣行についても保昌は『日本近代文学大事典』第4巻(1977)の「月報」項で解説している…

月報文章には作家の回想があり、作品にまつわるエピソードありで、資料としても有益、読み物としても興味深いものが少なくない。ただし散逸し、目こぼしされがちで著作等に漏れて月報文章のまま埋もれてしまっているものもある。(p. 139)

と、改めて指摘されてみると、なるほど尤もではあり意味深長でもある。そうした危惧があったればこそ、岩波書店や筑摩書房のような大手の文藝出版社が月報を合本化することで「月報文章のまま埋もれてしまっている」状況の改善

に少なからず寄与してきたし、最近では講談社も学芸文庫で自社全集の月報を掘り起こして『個人全集月報集』のシリーズを始めている。<sup>1</sup>

何しろ個々の月報記事は原稿用紙で10枚足らずの規模しかなく、(後述するように)月報自体の書誌的位置付けも不明瞭にされてきたから、貴重な情報を含んだ記事が掲載されていても後世に伝えられにくい。それに、たとえ書誌に記述されていたにしても、綴じられない形態の月報は適切に管理されているとは限らず、いざ読もうとすると所蔵先を知る手段が不十分であることを経験者は身に沁みて識っているはずである。記事がどこかに転載されていれば取り敢えずは間に合うであろうが、転載の有無や再録先を見極めるには(皮肉なことに)更なる熟練と手間とを要するというのが現実であろう。

というわけで、本稿での主張を先取りしてここに開陳しておく、月報をストレス無く利用するには、あらゆる月報類のすべての頁が集成されて、そのうえで執筆者と記事名の索引がデータベースに構築され、それを元に全集別に『月報細目』が作成され、それらすべてがインターネットを介して利用できる環境の実現を訴えることに逢着するのである。最近の月報への関心の高まりに乗じて、今その整備に着手すれば相当な成果を見込めよう。しかし先延ばしにしていると、折角散逸を免れて歳月を生き延びてきた月報であっても、用紙の酸化が進んで埃の山と化してしまうであろう。

諸文献を頼りに月報の拾い読みをしていると、興味深い記事に行き当たる度毎にこの文章が再び人の眼に触れることがあるだろうか、ひょっとしたらこうした情報も埋もれてしまうのではないかと心配になることが多い。そこで、そうした例を幾つかアト・ランダムに並べてみよう。

---

<sup>1</sup> 2012～16年に4点が刊行されており、『現代の文学』(1971～74)の月報集の他、宇野千代、円地文子、佐多稲子、庄野潤三、武田百合子、永井龍男、藤枝静男、安岡章太郎、吉行淳之介の全集から月報が掘り起こされた。

事例①：岩波書店の『普及版 漱石全集』第1巻（1928年3月）の「月報1」には「現存せる原稿」と題されたりストがあり、21点についての所蔵者名が記されている。埋め草の積もりであろうが、当時の所蔵先を今リストに作成しようとしたら一苦労させられよう。戦災を経た後の現所蔵先や、自筆原稿を複製で読めるものであろうか、現況を調べてみたい気持ちにさせられたりする。

事例②：これは谷沢（1974<sup>2</sup>）由来の情報であるが、岩波版『新輯定版 鷗外全集 <著作篇>』第2巻（1936年6月）の月報「鷗外研究1」に佐藤春夫が「「半日」のことなど」を書いて、短篇「半日」が当時の『鷗外全集』に収録されなかったには志げ夫人の遺志が強く働いており、続篇「一夜」も鷗外が「夫人のヒステリー爆発に負けて焼き捨てた」（p. 106）と明かした。それに長女森茉莉が「半日」について誌した月報記事（1953）も添えておこう。

事例③：上田健次郎（一水社）は、第二次『佐々木邦全集』第3巻（講談社、1974年12月）の「月報3」に「不肖の弟子」を執筆して、明治學院高等部で英語を教える旧師の冴えない姿を、

…期待外れに、いささか戸惑いの感を抱かざるを得なかった。授業は至って平凡、というより、むしろ少々陰気くさく、およそユーモア作家として期待していたような明るさ、軽妙さは望むべくもなかったからである。終始うつむき加減に、抑揚の乏しい調子で、淡々として訳読をつづけて行く先生の授業ぶりに、何か物足らなさを覚えたのは、これまた私だけではなかったろう。

とナカナカ辛辣に耳打ちしている。やはり月報の気安さがあるからこそ回想で、それだけに本体巻に収録される見込みは無さそうな文章である。吃驚もさせら

れるが、不肖を自任する弟子が旧師に寄せる親近感と打ち解けた無礼講振りで佐々木の姿をホログラム風に浮き上がらせる効果も醸して微笑ましい。

事例④：福田恆存（訳）『シェイクスピア全集 13：マクベス』（新潮社、1961年11月）の「月報 13」に「シェイクスピアの面白さ」を寄せた福原麟太郎は、原文を読んでいた戸川秋骨や平田禿木が示した Shakespeare 解釈には揺れが見られたが、福田訳は「日本語が原文よりもはるかによくわかり、よく内容を伝え、文章の調子でも写して」巧みであったので読者も作品の面白さを述べ易くなったと福田訳を歓迎する。再録されることの多い福原の文章のうちでも転載されなかったもので、逸文になるかも知れない。

事例⑤：『シェイクスピアの面白さ』（新潮社、1967）の著者である中野好夫が『伊藤整全集』第19巻（新潮社、1973年9月）の「付録 19」に寄せた「淡々、水の如し」には、「水魚の交わり、ほどではなかった伊藤との関わりが回顧され、彼の人物像が淡々と描かれている。しかしこの月報記事は全8巻の『中野好夫集』に収録されておらず、彼の著作目録にも記述されていないので、中野サイドの情報からこの文章に辿り着くルートが無さそうである。<sup>2</sup>

事例⑥：10歳年少の伊藤と1940年頃から面識のあった福原は、『伊藤整全集』第9巻（新潮社、1973年8月）の「付録 9」に「伊藤さん」を執筆している。それを読むと、友人の大熊信行が経済学を教えていた関係で福原も知っていた小樽高等商業学校を伊藤は卒業していた。そこから伊藤は同系の東京商科大学（現一橋大学）に無試験入学を認められた。その伊藤が『文藝』（河出書房）で対談するため1956年秋に福原宅を訪れたが、何故か記事はボツになった。こ

<sup>2</sup> 「著作目録」『中野好夫集』第8巻 筑摩書房 1985年8月25日 pp. 477-535. 「中野好夫著作目録」『沖縄文化研究』法政大学沖縄文化研究所（編）第12号 1986年 pp. 443-526.

の「伊藤さん」には、東京高等師範学校卒業で文學士ではなかった福原が東京帝國大學に進学しようと「どこかの高等学校へ行ってその全科卒業資格試験を受けようかと思って準備していたが、やめてしまった」とカミングアウトされている。福原の文章を読んできた筆者（藤井）には初耳の情報であった。

事例⑦：本稿の冒頭で触れた大屋は『蒐書日誌』の第1巻（2001）で、『二葉亭四迷全集』全8巻（岩波書店，1937～38）の月報に触れて、

…ほとんどはこの月報以外で読めるものだが、しかし貴重なのは、ロシヤの二葉亭に宛てた朝日新聞社からの書簡や、船中で死去した二葉亭についての賀茂丸事務長の報告（長文である）、あるいは克明な遺産目録、死亡診断書などが収録されている点だ。これらのなまなましい資料を見るのは私ははじめてだ。そして現在〔1989年頃〕刊行されている…筑摩書房版『二葉亭四迷全集』〔1984～93〕にこのような資料…が最終巻に収録されればと思う。（p. 17）

と、二葉亭の没後約30年に公開された記録文書の存在を教えている。<sup>3</sup>ところが後継の岩波版『全集』（1953～54 & 64～65）は新聞から関連記事を転載しただけで「なまなましい資料」を収録していない。ということで、月報が情報の暫定的保管場所として機能してきた例と見做せよう。一連の文書を本体巻に収録したのは、筑摩書房版『全集別巻』（1993年9月，pp. 89-92 & 7-58）になってからで、岩波が月報に報告してから更に半世紀が過ぎていた。ここに月報ならではの速報性も併せて指摘できるであろう。

---

<sup>3</sup> 月報「二葉亭研究2」（1937年12月）の冒頭6頁に「未開封の手紙」が、「同3」（1938年1月）に上述の他に船客係「山川武吉翁の談」や「病床日誌」等も10頁に及んで掲載。

事例⑧：『近代文学草稿・原稿研究事典』（八木書店，2015）から教えられたのであるが（p. 24），『芥川龍之介全集』第2巻（岩波書店，1927年12月）の編者のひとり小島政二郎は、「蜘蛛の糸」を最初に掲載した『赤い鳥』創刊號（1918年7月）の編集にも関与していたので，芥川原稿に加えられた鈴木三重吉による無遠慮な朱筆<sup>4</sup>が文章の改変にまで及んでいた事実を知り得る立場にあった。それを芥川に報告しそびれた小島は，この『全集』の本文で本来に戻せたと第2巻「月報2」の「校正を了へて」で告白している。

以上①～⑧の事例からだけでも，月報ならではの面白さや資料としての可能性が想像されるであろう。こうした小粒な月報文章でも執筆者が著名であれば転載される機会にも恵まれよう。しかし大多数の執筆者にあっては，転載どころか月報に執筆した事実すらも忘れられてしまいそうである。何処かの「物好き」が偶々月報の何号かを開いて何かの記事に興味を覚え，それを何処かに言及でもしてくれれば，それが後世の目に触れるチャンスも増そう。しかし記事の大多数は，本体の発行時に読み捨てられてしまったら，その後は「月報文章のまま埋もれ」る運命を強いられるであろう。

日本文学全集についての最近のある研究書を読んでいたら，1962～65年に集英社が刊行した『新日本文学全集』が「月報に到るまで十分に楽しめるものであった。…月報で一冊の本を編みたいほどである。」と絶賛されていた。<sup>5</sup> とりわけ藤原審爾，三浦朱門，進藤純孝，遠藤周作，山川方夫，瀬沼茂樹が執筆した文章が面白いらしい。筆者（藤井）もその月報を読みたくなった。つまり奇特定の研究者が言及してくれたおかげで，一部の月報記事に新たな寿命が追加された格好になるう。

<sup>4</sup> 朱筆の入った原稿を神奈川近代文学館が原色で複製（2004）して現在も頒布している。

<sup>5</sup> 田坂憲二『日本文学全集の時代：戦後出版文化史を読む』慶應義塾大学出版会 2018年3月30日 pp. 131-132. 口絵に並ぶ全集別々川端康成、巻の写真から本文に繋がる構成。

しかし筆者（藤井）が頼りにしている CiNii（国立情報研究所書籍データベース）は、『新日本文学全集』本体の所蔵館なら教えてくれるが、月報の所蔵状況までは表示していない。所蔵館の OPAC（オンライン蔵書目録）を個々にチェックしていけば月報に辿り着けるかも知れない。しかし全頁の複写は著作権絡みで、謝絶、されそうである。（月報だけの貸し出しはされないであろうから）本体と一緒に借り出すとなれば書き留め料金並みの費用負担を覚悟する必要もある。見当違いの号や途中頁の欠けた月報が届く心配も無いことはない。そこで筆者は、目指す月報を挿み込んだ本体の巻次を手探りで特定し、本体を在庫する古書店に月報の有無を確認したうえで5点の月報を（本体と抱き合わせで）購入したが、その数頁を読むのに（探索作業は愉しみのうちとしても）金 6,000 円超と、年金生活の身にはチト痛い出費を強いられた。<sup>6</sup> 現在の未整備な環境で月報を読もうとすると、このように多少の経験と手間と過大な出費を覚悟しなければならないのである。

筆者には、かつて『福原麟太郎著作目録』（九州大学出版会、2014）を執筆していて月報記事の入手に苦勞させられた経験がある。福原が残した「入稿メモ」での記述を他の書誌類と突き合わせて、彼の月報類への寄稿が約 150 件あったことまでは見積ったが、短文であったせいから「メモ」にも掲載先が走り書きされただけで、タイトルは無かったり暫定的なものでしかなかったり、現物に辿り着くまでに苦勞させられた。その頃は勤務先の図書館でもまだ OPAC に①印で付属資料の有無を表示していなかったもので、書庫で月報を捜し回ったものである。しかし（散逸するに任されていた気配もあり）空振りが多かった。研究図書費での古書購入も原則認められなかったもので、月報のために自腹を切って本体ごと購入したのであるが、古書店に月報の有無を問い合わせたがられることもあった。いよいよ手詰まりになると、図書館の ILL（相互貸借）

<sup>6</sup> 進藤のは期待外れながら、併載の遠藤の「父がわりの役」は全集未収録の掘り出し物。「遠藤狐狸庵先生のこと」での三浦の筆遣いは遠藤との掛け合いを想像させて微笑ましい。

係から本体の所蔵館に片端から問合せもらうなどして、結局 150 件ちゅう約 130 件の月報記事を再録先と共に記述することができた。しかも月報でしか読めない文章が 40 件あって、そのうちの約 20 件が既に逸文になったと推測された。ともあれ、こうした経験を強いられば尚更のこと、月報を共有できる場の早急な実現が望まれてくるのである。

## 発生期の月報

〆月報、は日本の出版界特有の慣行として今日ではすっかり読書人の間に馴染んでしまっているので、改めてその歴史を振り返ろうとまでは着想しないであろうが、その発生の一瞥してみれば月報への関心が呼び起こされ、その長短が理解され、そして保存の必要性も再認識されるであろう。

大正 12 (1923) 年の関東大震災により、多くの書籍が焼失してしまい、そこからの需要を満たすために、一冊 1 圓 (現在の約 2,000 円) 前後という当時にしては格安の価格設定で数百～千頁の上製本が予約販売方式で企画され、宣伝され、大量に配本されて、従来書籍を贅沢視してきた庶民までも読者層に取り込む勢いを得て、〆圓本、と呼ばれるようになった。この薄利多売式商法は昭和初期の数年間に出版界を席卷し、連動して月報を添えるという商慣行を促すことになった。したがって圓本に手を染めた出版社は、多くの購買者を獲得する必要から競合他社との間で強烈な販売合戦を展開させて、広告紙面を新聞に買い漁った。<sup>7</sup> それと同時に、予約会員に脱落者を出さない手段として、次回配本巻に期待を抱かせる誌面を前面化させた小冊子を読み捨て御免の紙質で大量に印刷して配本の度に配付するようになった。そうした歴史の流れで、〆圓

---

<sup>7</sup> 『新潮社 100 年』(1996) の p. 136 によると、1927 年に新聞広告のみで 840 頁分あった由。

本、と呼ばれる販売方式と「月報」を添える商慣行とが合流して、昭和戦前期にこの日本独特の慣行が定着するようになったのである。

そう見定めた青山毅は、圓本に挿み込まれた月報を精力的に収集し、各号の掲載内容を詳述した「月報細目」という基礎資料を編纂して、『文学全集の研究』（1990<sup>2</sup>）に集成してくれた。それで本稿でも、青山が注目した圓本全集から比較的流布したものを選んで骨子に据え、更に筆者（藤井）なりに圓本および圓本とは距離を置いた文学系全集も絡めながら、編年体風に月報の歴史を俯瞰してみることにした。

■ 1925（大正14）年6月23日～1928（昭和3）年6月15日 ■

① 『校註日本文学大系』 全24巻+別巻1 国民図書 申込金4圓/各冊3圓80銭。

〔月報〕：「校註日本文学大系月報」 全25号 《二つ折り/菊判（232×157）<sup>8/</sup>4頁》。

国民図書が「日本文学の本流を形造つて居る作品を、一貫せる體系の下に悉く網羅して、之に現代的な新装を施した」（内容見本）全集である①は、挿み込まれた「校註日本文学大系月報1」に拠ると、1925年春において「豫約刊行物中の超然たる第一位」となった大型企画らしい。定説のように月報の「はじめとみられるのは円本流行」<sup>9</sup>ならば、改造社版の③『現代日本文学全集』が①に先行してはなくてはならない。ところが、改造社が初めて③に「改造社文学月報」を挿み込むようになったのは第2回配本の1927年1月20日であった。いっぽう圓本ではない①では第1回配本の第2巻『竹取物語…』が「月報1」を挿み込んでいたから、定説より1年7ヶ月は先行して月報を添付していたことになる。深入りはしなかったが、月報の発生時期を遡らせる事例は捜せば更

<sup>8</sup> 月報の仕様については、囁目し得た範囲で記述したに過ぎず、網羅的なデータではない。

<sup>9</sup> 『日本近代文学事典』第4巻（1977）の項目「月報」における所説がその典型例になる。

に出てくるかも知れない。

①の4頁建ての「月報1」では、第25巻『別巻 國文學研究資料…』が無料配付される方針が劈頭で打ち上げられている。第2頁以降に読み進むと、従来あった写本の誤読を正した本文で「堤中納言物語」をこの第2巻が収録したこと、次回配本の第3巻のために「更級日記」を校訂していて錯簡が発見されたこと<sup>10</sup>、「枕草子」でも本文策定に複数の伝本を照合した努力を報じるなどして、この全集での本文校訂の厳密さをアピールしている。

また、1928年6月15日に最終配本された『別巻 國文學研究資料…』に「月報25」を読むと、

この二十五巻こそ遅れたれ、豫約の二十四巻はほゞ豫定通りに完了しました。この二十四巻が終了に近づいた頃から、出版界は、所謂圓本の爲に一轉して、その舊態を守つて進みつゝある我が大系本は、多少の影響を受けざるを得ないのであります。…現在の圓本などを見ると、最初の勢ひは何處へやら、巻毎に夥しい落伍者が出て、中に甚しいのは、最初三十萬以上も出してゐたのが、今では六七萬しか發行されていないといふみじめなのさへあります。

と、③に始まる薄利多売に走る風潮を揶揄しながら、アンチ圓本方針を貫いて手堅い成果を得られた安堵感を購読者に伝えようとしている。こうした方針は②にも踏襲されており、現在でも①と②を合わせるとCiNii加盟図書館だけで300館以上で所蔵され続けているほどに認知され普及したようである。

---

<sup>10</sup> 担当の玉井幸助は『更級日記錯簡考』（育英書院、1925）という画期的研究に結実させた。

■ 1926（大正15）年6月25日～1928（昭和3）年12月18日，

最終配本に月報無し：1929年7月31日■

② 『近代日本文学大系』 全24巻+別巻1 国民図書 申込金5圓 / 各冊4圓。

〔月報〕：『近代日本文学大系月報』 全24号 《二つ折り / 菊判（234 × 153） / 4頁》。

①と同様に予約会員を募った②も販売形態こそ圓本的であったが、全巻購入すると105圓にもなる「高級美本」の頒布であって、圓本ではなかった。それでも②では初回配本の第18巻『十返舎一九集』（1926年6月25日）から「月報1」が始まっていたのであるから、改造社が圓本を登場させる半年以前に月報を添付していたことになる。

頁をめくってみると、例えば第12巻である『黄表紙集』（1927年6月）の「月報11」が「早くも読書家の圓本苦情」を掲載して、圓本に追い上げられているらしい苦況を窺わせる。しかも②では、第18巻『十返舎一九集』、第21巻『人情本代表作集』、第22巻『落語滑稽本全集』、第24巻『川柳狂歌集』が発禁処分になっていたので、第20巻『爲永春水集』（1928年8月）の「月報21」からは「暴力が最も幅を利かす時代…人心緩和の一助として軟文学の取締の如きは、（徳川文藝は淫蕩文学ではありません。）却つてこれを緩うすべきものではありませんか。」と、ほやきの声が聞こえてくる。

②では、第1巻『假名草子集』（1928年12月18日）添付の「月報24」が月報の最終号であって、第25回配本の別巻すなわち『日本小説年表附總目録』（1929年7月31日）には月報は制作されなかったようである。① & ②で見たように、改造社版の圓本③に先行する月報の発行例が実在するいじょう `月報、即 `圓本、とする発想は必ずしも史実通りではないが、月報の大量発行と圓本の流行がほぼ時期を等しくしていたと取り敢えずイメージしておいても、大筋で不都合は無かろう。

■ 1926（大正 15）年 12 月 3 日の初回配本に月報無し、

第 2 回配本以降添付：1927（昭和 2）年 1 月 20 日～1931 年 12 月 18 日■

③ 『現代日本文学全集』 正編 37 卷 + 續編 25 卷 + 別巻 1 改造社 並製 1 圓 / 特装版 1 圓 40 錢。

〔月報〕：「改造社文学月報」 全 60 号 《二つ折り / 菊判（218 × 147） / 8 ～ 32 頁》。

初回配本の第 6 卷『尾崎紅葉集』（1926 年 12 月 3 日）には月報が無く、翌年になってから第 2 回配本の第 9 卷『樋口一葉集・北村透谷集』（1927 年 1 月 20 日）で初めて月報が挿み込まれた。2 冊配本の月があったり、最終配本（1931 年 12 月 18 日）で第 57 卷『小泉八雲集・ケーベル集・野口米次郎集』と齋藤昌三（編）の別巻『現代日本文学大年表』が同時発売されたりして、全 63 冊が 61 回で配本され、月報は 60 号分が発行された勘定になる。

「改造社文学月報 1」～「月報 14」の題字下には、月報の「特別通信機關」～「追補連絡機關」～「相互の俱樂部」～「文学雑誌」としての用途が掲げられている。その具体的内容については山領健二が「『改造社文学月報』とその読者」で、〈1〉『改造全集』の次回配本の予告としての作家・作品紹介、〈2〉明治・大正文学の文学史的研究、資料・解説、〈3〉その他のエッセイ、〈4〉文壇消息・雑報、と 4 つの傾向に分類している。

そこで、試しに「月報 1」を開いてみると、第 1～2 頁目に「發刊の言葉」と「整理係よりの御詫び」があって、差し詰め〈4〉であろうか。第 2～4 頁での『谷崎潤一郎集』に触れた「次回の配本」や「配本準備中の書目」は〈1〉になろうし、前回配本の『尾崎紅葉集』に対する（校正が杜撰であったか）詳細な正誤表があって、それは〈4〉であろう。5～7 頁の露伴道人による「樋口一葉」は〈2〉で、読み応えがある。そして 7～8 頁を埋める『文学界』の運動（A,B,C）、「文学界の五羅漢」（紙魚生）、「透谷の苦勞勞性」（戸川秋骨）は〈3〉として分類されよう。

2017年2月に愛知の古書店が③の「月報」から正編36号分をネットの「日本の古本屋」に出品した。90年を経た酸化作用で紙質が脆くなっているもオリジナルではあり、全60号の復刻版（48,000円＋税）に比べるとタダみたいな値付けに、つい注文してしまった。古書店の商品説明に寄稿者の顔触れを一瞥するだけでも、黎明期の「月報」の充実振りが想像されようし、彼等の寄稿した文章にも期待が募らされるはずである。

書名：改造社文学月報 1号～36号迄 価格：¥3,000. 書籍情報：  
 改造社 幸田露伴, 戸川秋骨, 木村毅, 谷崎精二, 田山花袋, 鷹野つぎ,  
 平田禿木, 馬場孤蝶, 正宗白鳥, 横光利一, 野口米次郎, 片岡鉄兵, 広  
 津和郎, 泉鏡花, 稲垣足穂, 堀口大学, 室生犀星, 谷崎潤一郎, 久保田  
 万太郎, 吉井勇, 宇野浩二, 長田幹彦, 高浜虚子, 佐藤春夫, 武者小路  
 実篤, 内田魯庵, 島崎藤村, 豊島与志雄他. 解説：昭和2年1月～  
 4年12月 36部各号8頁～32頁 各号背綴跡 5号背切れ.

このような最近の相場にも見られるように<sup>11</sup>, 世間の月報に向ける視線には現在においても醒めたところがあって、オリジナルに限らず合本化された月報や復刻版でも古書価となると、押し並べて芳しくない。後述するように、一種独特な取り扱い難さもあって月報は一般的な読者には受けが悪いようである。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 4-15. 【月報復刻】：青山（1990<sup>3</sup>）が「著者名索引」, 「巻別配本順と刊行年月日」, および山領による解説を併載する。

ここで月報について、ちょっと〈2〉的脱線に及んでみたい。購読希望者に1圓の会費で会員登録をさせて、全巻を予約し購読し続けた会員にその1圓を

<sup>11</sup> 『世界戯曲全集』⑥の月報全40号4,000円, 『近代劇全集』⑦全43号2,000円であった。

最終巻の代金に充てるシステムを提案して、出版社&読者&執筆者を乱舞させた〘圓本、ブームの火付け役を自認する人物が名乗り出ていた。後に「明治文化研究者として一時代を画し、文化交流に在野からいくたの貢献をし常に時代の先導的役割を果たした」功績により第二十六回菊池寛賞を贈られた自称〘投書家あがりの文士、たる木村毅である。<sup>12</sup>

彼の『私の文學回顧録』（1979）に第36章「円本旋風の起原」読むと、関東大震災に辟易して関西に移住していた谷崎潤一郎がひょっこり上京して来て改造社で、「一冊一円こっきりの定価で、自分の小説を三、四冊出してみてくれないか」と、山本実彦社長に持ちかけたそうである。後に山本から相談を受けた木村は、自らの教養の源泉と定めて愛読してきた *The Harvard Classics* (1910) という英訳世界名著全集を見据えながら、そうした企画は「明治以降の文学全面にわたって網羅すべきで、つまりその叢書をそなえれば、明治の文学から広く文化一般、ひとつおり分かるように編集すべきだ」と威勢よく突き付けた。併せて木村は、読者から会費を集めてそれを運転資金に転用すれば自己資金も要らないという（①や②が既に始めていた）商法を彼に伝授したそうである。

雑誌『改造』の経営で苦戦を強いられていた山本社長はアイデアマンでもあったので、驚天動地の新聞広告&宣伝部隊の投入&各地での文士講演会など、斬新な前宣伝を大々的に展開させて会費を集めまくり、木村に言わせると、

…世は湧くが如き歓迎であった。大震災後、明治文学への興味が勃興したが、しかしその原典たる作品は大半、稀書となって、一般の手には入らない。…それらがこの全集をそろえれば、みんな収録せられているのだから、学校や図書館は言うに及ばず、個人の愛書家もこぞって予約購読を申しこんだ。じつに一挙にして三十七万という予約申込み… (p. 363)

---

<sup>12</sup> 筆者は「木村毅と英文学」を『人文論叢』第48巻4号（2017年3月）に発表している。

を動員したほどの盛況であった。当時は書籍が贅沢品であったが、一冊1圓であれば庶民の手に届かないこともない価格設定だったようで、『平凡社六十年史』（1974）も予約金の「振替用紙を積んだ郵便局の車が、改造社の表に何台も横づけになった」（p. 82）と、当時の一般読者の熱狂振りを伝えている。

時を同じくして新潮社からも木村は助言を求められており、④『世界文學全集』のために収録作品リストを作成していた。③や④の驚異的販売部数はブームを引き起こして「数年の間に、百余種類の類似計画が出て、いつとは知らず「円本」という名称が定着」（木村，p. 367）したくらいであった。<sup>13</sup> 取り分け改造社版『現代日本文學全集』③について木村は、「選択が一番公平で適性で、最高のぜひ読まねばならぬ作は、たいてい入っている」（p. 361）と誇らしげに回顧している。

そのいっぽうで瀬沼茂樹は、こうした風潮を捉えて、「実際、円本の種類は200種をかぞえるといい、文化の全領域にわたり、なんらかの円本に手を出さぬ出版社はまれ」になってしまい、その煽りから「学術書や研究書のような特殊の出版を困難にし、営利性をあらわにしたため、出版事業の低俗化」を招きかねないと、圓本のもたらす弊害の方を危惧していた。<sup>14</sup>

多くの分野で圓本が雨後の筍さながらに次々に出版されて、それぞれの販売戦略的要請から無数の月報が市場を満たしたであろうことは想像に難くない。どの出版社にしても、月報によって読者の期待を煽って次回配本分の購入へ繋げ続けないと（圓本であろうがなかろうが）会員の脱落を招いて継続的配本が頓挫しかねない危うさを抱えていたからである。そこで筆者（藤井）はネットで「日本の古本屋」の出品リストを検索して戦前刊行の文学系全集や叢書類で

<sup>13</sup> 『圓本全集販賣目録』（1936）は約400件の全集・叢書・文庫類について巻建て、古書相場、時には配本順も記録するが月報の有無には触れていない。月報は当時の古書業界に認知されなかったようだ。本書は「国会図書館デジタルコレクション」に公開されている。

<sup>14</sup> 『日本近代文学大事典』第4巻（1977）の項目「円本」における瀬沼による指摘から、青山（1979<sup>3</sup>）における③についての解説も具体的で参考になる。

月報付きのものを拾い集めてみたところ、約 150 種類まで数えることができ、月報発生期から開戦までの十数年間が月報添付の最盛期に当たっていたとの印象を強くした次第である。閑話休題。

■ 1927（昭和 2）年 3 月 16 日の初回配本に月報無し、

第 2 回配本以降添付：4 月 15 日～1932 年 8 月 15 日■

④ 『世界文學全集』 第一期 38 巻＋第二期 19 巻 新潮社 1 圓。

〔月報〕：「世界文學月報」 全 37 号＋19 号 《二つ折り／四六倍判（250 × 185）／第一期 8 頁，第二期 4 頁》。

「世界文學月報 1」が挿み込まれたのは、初回配本の第 12 巻『レ・ミゼラブル』（1927 年 3 月 16 日）ではなく、第 2 回配本の第 26 巻『イプセン集』（4 月 15 日）からであった。『新潮社 100 年図書総目録』（1996）によると、④の予約数が予想に倍する 58 万部に昇っており（p. 135）、そうした反響から、後に瀬沼（1965）も「世界文学の方が、日本文学より売れることはこの時から明らかになった」（pp. 172-173）と、刮目させられ認識を新たにした。

「月報 1」の冒頭頁は格調高い「日本翻譯史（一）」となっており、執筆したのは④の編成を立案した木村毅であった。また「月報 8」（1927 年 11 月 14 日）を読むと、藤代禎輔に「猫武士氣焰録」と題された粋な戯文があったことを教えられるし、「月報 9」（12 月 15 日）には英国の文人の日本文学へ寄せる関心の高さと当時の英訳された作品も挙げられていて興味を覚える。<sup>15</sup>

1930 年 6 月 1 日から④が第二期に移行し、最終の「月報 第二期 19」に「完了に際して」を読むと、〘翻譯の大衆化、を意識しながら読みやすい新訳や改訳を心掛けてきた新潮社としては、改造社式の既存作品の掲載権を買い集めるだけの方式とは異なって、編集方針でも

---

<sup>15</sup> 全 56 号を拾い読みしたら面白い抜き書き集もできようが、それは別の機会に譲りたい。

眞に第一期第二期を通じて堂々五十七卷…大作傑作揃ひで、その偉觀は恐らく世界無比の文學圖書館であり、作品によつて體系づけられた興味深い大世界文學史であると信じます。

殊に第二期十九卷に於ては、殆ど世界出版界最初の、最も廣範圍に亘つた文學全集でありまして、混沌たる現代文學界に最高指針を示す大金字塔を築いたものである…

と、矜持のほどが窺われる。そうした勢いが、瀬沼（1965）によると、この前代未聞の大成功で加速されて翻訳料の支払いを印税制に切り替える契機にもなつたらしいから（pp. 183-184）、翻訳者たちの月報に寄稿する筆にも大いに気合いが入つたことであろう。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 120-133。【月報復刻】：青山（1990）。「著者名索引」、「巻別配本順と刊行年月日」および解説も併載する。

#### ■ 1927（昭和2）年5月15日～1932年3月5日 ■

⑤ 『現代大衆文學全集』 正編 40 卷 + 續編 20 卷 平凡社 1 圓。

〔月報〕：「大衆文學月報」全 60 号 《二つ折り / 四六倍判（270 × 193）》→第 43 號から《四六判 / 4 ～ 16 頁》。なお青山（1990<sup>2</sup>）に依ると、第 43 ～ 50 號の刊記には号表示が無く、発行年月のみ記されている由である。

この書名に込められた⑤の立ち位置については、『平凡社六十年史』（1974）による解説がある。

マス・メディアの成熟にともない、あらたに読者層に組み込まれた大衆は、私小説の伝統にあきたらず、かといって講談・読物のたぐいにも満足できず、新しい形式と内容をもとめるようになる。その要求にこたえようとした新興文学が大衆文学であった。（p. 84）

と、今日の「大衆文学」とは多少ニュアンスを異にするらしく注意を要する。

予約者を25万人集めて大成功を取めたと取り沙汰された⑤だけに、例えば第25巻『伊原青々園集』（1929年10月1日）に「月報30」を読むと、筆調にも勢いが感じられる。冒頭頁に伊原による自作品への解題があり、第2～3頁には次回配本予定の第10巻『矢田挿雲集』の紹介と、『江戸から東京へ』（1920～23）を執筆した矢田の苦勞のほどを岡本綺堂が思い遣った文章が続き、最終頁は広告に宛てられるという月報に典型的な構成で、読ませる内容であった。

更に『平凡社六十年史』（pp. 91-93）から⑤にまつわる数字を拾っておくと、平均1,000頁（1928年には第9巻『吉川英治集』が1,216頁）で、一冊の頒価は1圓、取次店へは7.5掛で卸す。製作費は56錢であったから、版元に残るのは19錢。そこから著者へ10錢の印税が支払われた。なかでも初回配本の第1巻『白井喬二集』は33万部が刷られたので、⑤の実現に貢献した白井には33,000圓の印税が転がり込んだ計算になる。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 182-192。但し第1～2號への内容細目を欠き、巻建てや配本順は示されていない。

■ 1927（昭和2）年6月1日～1930年11月10日、

別巻には月報「編輯たより」無し：12月31日■

⑥ 『世界戯曲全集』 全40巻+別巻『世界戯曲史』 近代社→世界戯曲全集刊行會 90錢→1圓（第二次募集）。

【月報】：「世界戯曲全集編輯たより」 全40号 《四つ折り／四六判（189×128）／8頁》。但し5号分は四つ折りで、第40號は「配本順」併載の4頁。

既刊の『近代劇大系』全16巻（1923～25）と『古典劇大系』全19巻（1924～27）<sup>16</sup> という蓄積を再利用できた近代社は、頒価を90錢に設定して大々的な

<sup>16</sup> 第6巻（1926年5月15日）に次回配本を予告するカードが挿まれているので、『古典劇大系』の頃は同社も近刊紹介を兼ねた月報の類いを着想していなかったと推測する。

新聞広告を展開させながら、競合する第一書房の『近代劇全集』<sup>⑦</sup>より10日早い発売を敢行した。

案の定、膨大な経費と薄利が祟って近代社は資金繰りに窮し、半年後の1928年1月から頒価を1圓に上げた第二次予約募集に出て起死回生を期したが、新聞広告掲載料を博報堂に支払えず、<sup>⑥</sup>の出版権を手放すに至った。その頃に配本された第7巻『英國近代劇集』（1928年3月13日）はJohn Galsworthy（1867-1933）の戯曲5本、James Barrie（1860-1937）の2本、John Masefield（1878-1967）の2本を収録しており、とりわけ澤村寅二郎訳「忠義」（*The Faithful*, 1915）は、忠臣蔵、からMasefieldが翻案した興味深い三幕物であった。また、「編輯たより9」（1928年2月）と「たより10」（3月）は、英国人の好みGalsworthyの地味な作風に反映されていたと解説して説得力があった。

ともあれ藤木宏幸が評するには、全時代の戯曲作品をカバーして「これだけ各国ごとに網羅的に全集が編まれたことはなく、ドイツおよびその周辺国の表現主義戯曲集やロシア・ソヴェトの労農戯曲集など、現在でもその価値を失わない」（p. 383）レベルの集成を近代社版は実現させていたそうである。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 230-237。 【月報復刻】：青山（1991<sup>2</sup>）。「著者名索引」と藤木による解説（pp. 373-383）を併載する。

■ 1927（昭和2）年6月10日～1930年12月10日、

別巻に月報無し：1931年2月10日■

⑦ 『近代劇全集』 全43巻+別巻『舞臺寫眞帖』 第一書房 1圓。

⑥ 月報：『近代劇全集月報』 全43号 《二つ折り／四六判（175×113）／8～16頁》。

⑥に遅れること10日という発売であった。同じ邦訳戯曲集で、規模もほぼ同じでありながら、⑦『近代劇全集』は第一書房の刊行で、⑥『世界戯曲全集』

は近代社発行と紛らわしいこと甚だしい。比較のために英語圏の作品巻を数えてみたら、両全集とも英国5巻、アイルランド2巻、米国1巻と同じ巻建てに編成されていた。しかし⑥であれば Shakespeare や十八世紀の作家が含まれているのに、⑦では現代作家に限定した作品選択になっている。読者はどちらの傾向を歓迎したであろうか。瀬沼（1965）の判定では、

この全集合戦は、近代社の本が内容豊富であったにも拘らず、訳者・体裁・造本すべてにおいて、第一書房版に劣り、第一書房版の圧勝に終わったように思われる。円本にゾッキ（特価本）はつきものであるが、近代社版はゾッキ価格が安く、多く流れたことも、その反証となる（第一書房版はゾッキに出さず、返本を断裁したときいている）。（p. 184）

第一書房の長谷川巳之吉は、堀口大學の『月下の一群』（1925）のために「豪華本」と称する範疇を創出して出版史に名を残したが、それでも近代社の攻勢には大いに苦戦させられ、『舞臺寫真帖』の附録「近代劇全集總目録」の序文が明かすには、35,000 余あった当初の会員数が完結時には 6,000 に激減してしまい、辣腕で知られた長谷川も⑦により 120,000 圓以上の大痛手を蒙ることになったらしい。

月報記事では、長田秀雄「日本に於ける近代劇上演史」（8回）、新關良三「近代劇概論」（9回）、岩田豊雄「拂蘭西新劇壇の現勢」（7回）、昇曙夢「ロシア近代劇の發展」（7回）、永田寛定「近代西班牙の戯曲」（5回）といった連載が奮闘していたが、英国演劇論に相当する連載は見られない。

とはいえ、⑥の第7巻（1928年3月13日）では原文の入手難を理由にキャンセルされていた戯曲版 *Peter Pan*（1904）が⑦では澤村寅二郎により第42巻『英國篇』（1930年10月10日）で訳出されており、「月報38」（1930年7月10日）でも Barrie のこの作品は「難解難譯の評ある」と言及して澤村の功績を

暗に称えている。また「月報 43」（1930年12月10日）に松村みね子の軽妙な Bernard Shaw 論「アンドロクルスと運命の人」を読むと、月報の制作にも手を抜かず完結まで漕ぎ着いた長谷川の律儀さが想像されてくる。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 154–161. 【月報復刻】：青山（1991）。「近代劇全集総目録」, 月報執筆者の索引, 解説を併載する。

### ■ 1927（昭和2）年6月15日～1932年6月19日 ■

⑧ 『明治大正文學全集』 全50→60巻 春陽堂 1圓。

〔月報〕：「春陽堂月報」 全60号 《二つ折り／四六倍判（235×177）／第1号：4頁, 第2～39号：8～10頁, 第40～59号：2頁, 第60号：1頁》。第10～19号の刊記には号表示は無く、発行年月のみ。

改造社の③より半年遅れたスタートであった分、巻編成でも時代順に整然と並べる余裕があった。後に「昭和篇」として第51～60巻が追加されて⑧の書名も『明治大正昭和文学全集』と変更された。その昭和篇については、『日本近代文学大事典』の第6巻（1978）が「昭和作家の動向もうかがわれ、すこぶる興味深い編成」と好評価を示している。

いっぽう月報の評価については、谷沢（1979）による次のコメントがあり、

…「春陽堂月報」を通読すると、…月報なるものの編集があれこれと試行錯誤されている苦心が手に取るように感じられ、後年の整然たる計画的なお行儀のよさとはまた別の、草創期に独特な明けっ広げが興味を惹く。初期の転載と新稿の混在が、昭和四年一月の第二十号から新稿中心に移行する時代趨勢も、編集意欲の昂揚期がこのあたりにあったと理解されよう。（p. 35）

と、編集方針の変化を具体的に指摘して参考になる。もちろん、初期の号でも

「…所載」や「…より拔萃」の記事ばかりだったわけではなく、例えば「月報3」（1927年8月13日）には芥川龍之介の訃報に関わる頁があって、久保田万太郎が芥川の作風に変化が生じ始めていたと指摘して、「こん度の死に方も、東京人らしい、立つ鳥跡を濁さずといふ感じがします」と身近な人間ならではの印象を語ったりしている。

第48巻『戯曲篇第二』を予告した「月報6」（1927年11月13日）では、岡本綺堂が聴衆の好みの変化によって彼の作風も20年の間に影響を受けてきたことを認めており、『戯曲篇第二』のために「専らポピュラーといふこと」を勘案して10作を選んだと述べつつ、「舞臺を離れて唯スラ、と読み流されては少し困る」と注文を付けてきたところなぞは、月報ならではの気楽さが働いてのことであろう。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 38-46. 【月報復刻】：青山（1989）。「著者名索引」, 「巻別配本順と刊行年月日」, および青山（1978）も pp. 361-368 に併載。

改造社の③と春陽堂の⑧は出版界の通念を超える広告合戦で予約購読者を奪い合ったのであるが、草分け的な③が40～50万の予約者を獲得したのに対して⑧は20万に留まったことから、勝負は付いたようである。高島健一郎は春陽堂の販売面での敗因を指摘しながらも、作品編成では「当時の文学史観に忠実な編纂を行って」（p. 34）いて、「文学的に価値ある作品を収めているという点では、春陽堂の方が優れている」（p. 33）と好意的な評価も添えている。また『日本近代文学大事典』の第6巻（1978）は、春陽堂版に対して「構成の点では、家庭小説に力がいれられていた」（p. 94）傾向に注目している。青山（1978）も「改造社版に比べて、春陽堂版は一般受けするポピュラーなものをねらった」（p. 27）と見ていることから、出遅れた⑧としては親しみ易い作品選定で購買層の裾野を広げる戦略に出て③の穂拾いに健闘したということであ

ろう。

しかしディレクターの好みを勘案しての評価となれば、青山（1978）のように③の収録傾向が「春陽堂版の全集に比べてきわめて純文学的である」（p. 27）との見方も成り立つようである。瀬沼（1965）の分析もまた、

…出来栄えからみて、後者〔改造社版〕の方がはるかにすぐれていた。それは広義の文学の解釈に立って、いわゆる硬文学までをおさめ、文学を再評価する態度に出た高い見識によるものであり、春陽堂版は手持ちの札のアドヴァンティシによりかかって、小説中心に傾きすぎたからだ。（pp. 176-177）

と、春陽堂に対して辛い。なるほど1919年に発足したばかりの改造社には1878年創業の老舗には蓄積で太刀打ちできなかつたであろう。それだけに新興出版社らしい柔軟さを発揮させて斬新な作品編成も立案できたらうし、意中の作品を椀飯振舞の掲載料で買い集める荒技にも訴えられたらうから、社歴の違いは③に通好みの作品構成を実現させた評価できるのかも知れない。

#### ■ 1927（昭和2）年10月5日～1929年5月20日 ■

⑨ 『明治文化全集』（第一次） 全24巻 日本評論社 3圓。

〔月報〕：「明治文化」 全18号 《四つ折り / 菊判（223 × 153） / 8頁》。

1924年に尾佐竹猛、石井研堂、〔宮武〕外骨、神代種亮、木村毅、柳田泉、石川巖が政治学者の吉野作造を会長に戴いて、『日本近代文学大事典』第6巻（1978）によると、「明治初期以来の社会万般の事相を研究し之れを我が国民史の資料として発表すること」（p. 80）を基本理念と定めて発足させた明治文化研究會が⑨の発行母体であった。

研究用基礎資料320点を復刻して解題を添えた⑨の「發刊の辭」において、

吉野は「明治文化」と命名されたこの月報を「普通の全集のものに見る様な廣告ビラ代用の無價値なものにはしない」と宣言して、<sup>⑧</sup>圓本文化、なぞ物ともしない強気の3圓で頒価設定をして予約を募集した。もちろん動員できた会員数は圓本の比でなかったであろうが、資料的価値と解題の学術性に裏付けられた<sup>⑨</sup>は戦後にも改編が継続され、第二次（1955～59）→第三次（1967～74）→第四次（1992～93）と発展的に再版されてきている。

「明治文化」と題する以上は政治的な記事も散見されてくる。例えば、伊藤博文と明治政府が憲法の草案造りで参考にしたとされる機密資料「グナイスト講義筆記」を『西哲夢物語』（1887）がスクープして地下出版した事件に5本の記事が触れていたが、「明治文化」は発禁にならなかったようである。たかが月報と黙殺されたか、40年前の話なので時効に差し掛かったか、<sup>⑨</sup>の学術性が考慮されたか、あるいは筆者（藤井）が気を回し過ぎなのかも知れない。

【月報目次】：田熊涓津子（編著）『明治文化研究会事歴』関西大学国文学会1966年10月20日（関西大学国文学会刊行図書2）。田熊の書は「『明治文化全集』新旧版対照総目次」の他、機関誌『新旧時代』～第一次全集月報18号分～機関誌『明治文化研究』～月報の後継誌『明治文化』～第二次全集月報16号分（1955年1月25日～1959年2月10日）など、誌名が改まる毎に目次細目が作成されている。

【月報再刻】：『『明治文化全集』（旧版）月報総集』日本評論社1992年7月20日。第一次版月報（pp. 3-131）および第二次版月報（pp. 140-205）のそれぞれから「主要記事」、「雑録抄」（pp. 133-137）を正字・歴史的仮名遣いで再刻する。

■ 1927（昭和2）年11月30日～1929年2月28日 ■

<sup>⑩</sup> 『芥川龍之介全集』全8巻 岩波書店 4圓。申込金は第8巻『別冊』の代金に充当された。

〔月報〕：「芥川龍之介全集月報」全8号 《二つ折り / 四六倍判 (267 × 193) / 6 ~ 10 頁》。

薄利多売の圓本商法から距離を置いてきた岩波書店は、芥川と親交のあった小穴隆一、谷崎潤一郎、恒藤恭、室生犀星、宇野浩二、久保田万太郎、久米正雄、小島政二郎、佐藤春夫、佐佐木茂索、菊池寛を編集同人に迎えて、芥川の自殺から半年足らずで初回配本である第4巻の発売に漕ぎ着いていたが、圓本ではなかったこの⑩から月報を添付するようになった。

ところが、原稿に依拠しながらの本文の策定やルビの調査に手間取って編集作業が遅れて、8ヶ月の予定が16ヶ月掛かって完結した。それで「月報」には、校正の困難を訴えたり発行の遅延を詫げる文章が目につきがちなのであるが、時には「所謂圓本の、全集でも何でも無い刊行物が月一冊づつ出るからと云つて、そんなものと一緒にされては堪らない。」(第8号)と苛立つ場面があったりもする。それでも月報は、A4判を小振りにした平均8頁の堂々たる仕様で、他社製の月報とは自ずと風格を異にしている。

「月報」第5、6、8号からは⑩の予約者数が6,200 ~ 5,800名であったことが判るし、事例⑧は⑩の「月報2」から情報を得ていた。また、高橋邦太郎が「クラリモンドの事ども」(第8号)で芥川とフランス文学との接点を簡潔に要約しているし、佐藤春夫の「思ひ出すままに」(第4号)や沖本常吉の「芥川龍之介傳説」(第5号)などからも月報らしさを窺わせるぞっくばらん筆調が窺われる。

【月報目次】：『芥川龍之介事典』明治書院 1985年12月15日 pp. 733-734.

⑩での月報の号次→本体の巻次の対応は、「第1号」→『第4巻』(1927年11月30日)、「第2号」→『第1巻』(12月30日)、「第3号」→『第2巻』(1928年1月30日)、「第4号」→『第5巻』(3月25日)、「第5号」→『第3巻』(6月30日)、「第6号」→『第6巻』(8月25日)、「第7号」→『第7巻』(12月25日)、「第8号」→『第8巻別冊』(1929年2月28日)になっていると所

藏先から教示を受けた。<sup>17</sup>

そしてほぼ同時期の1928年3月15日に、岩波書店は「大正十五年頃から圓本が流行し初めましたから刊行會に於ては暫く素志を果たす事を躊躇いたし圓本も漸く下火になりかけたと思ひましたから初めて昭和三年に豫約募集に着手する事に致しました」と釈明に及んでから<sup>18</sup>、「従來斷じて圓本を扱はなかつた凸版印刷會社の熱心なる協同を受け」て、と格好を整えて<sup>19</sup>、一冊1圓で『普及版 漱石全集』全20巻の企画を打ち上げて、予約数10万と充分な手応えを得た。もちろん、圓本、となれば欠かせないのが、月報、であるから、この『普及版』も1929年10月5日にかけて「漱石全集月報」を挿み込むようになった。<sup>20</sup>

それからは堰を切ったように、岩波書店は『普及版 芥川龍之介全集』全10巻を各1圓50銭で1934年10月15日～翌年8月15日に売り出し、事例①に触れた『決定版 漱石全集』全19巻が1935年10月20日～1937年10月10日に1圓50銭で続いた。あるいは事例②に挙げた『新輯定版 鷗外全集〈著作篇〉』全22巻（各1圓50銭）&『同〈翻譯篇〉』全13巻（各1圓80銭）を1936年6月5日～1939年10月15日にも刊行するなど、圓本に準ずる価格帯の予約式全集を続々刊行して月報を付すようになった。

岩波書店はそうした事業を展開させるうちに、従來は読み捨てられてきた月報に資料的価値と営業上の可能性を見出すようになったようで、そうした遺産を再活用する商法で業界の牽引役を務めるようになってゆくのであるが、再び

<sup>17</sup> ⑩の月報は残存が少ない戦前の月報のうちでも難物であるが、福岡県荊田町立図書館から第3號を除く全冊を借覧できた。こうした資料の保存や複製が今後強く望まれる。

<sup>18</sup> 岩波書店版『普及版 漱石全集』の「月報20」（1929年10月）に記されていた一行。

<sup>19</sup> ⑩第5巻（1928年3月25日）の「月報4」が掲載した『漱石全集』の広告から。

<sup>20</sup> 小森陽一（他編）の『漱石辞典』（翰林書院、2017）に拠ると、『漱石全集』を其刊行會と岩波書店+大倉書店+春陽堂が1917～1919～1924年に増補してきたが、1928年以降は岩波書店の単独刊行になり、それを機に月報が挿み込まれるようになった（p. 262）。但し、『辞典』は、月報、に特段の注意を払ってはいなさそうだ。

谷沢（1979）から引用すると、

岩波書店が昭和十年代の紺色表紙『漱石全集』及び茶色表紙『鷗外全集』の月報を、完結後に読者の希望に応じて同色表紙製本として送り返す手間を引き受けたのが、恐らく月報重視の風潮を醸成したきっかけであろう。（p. 34）

と、この方面での顧客サービスの発端を掘り起こしている。そして、今日におけるその典型例として、岩波書店は1975年3月10日に『漱石全集』の月報から「昭和三年版」と「昭和十年版」を、1985年1月22日にも「昭和四十年版」を上製本に複製して自社製月報の資料的価値をアピールするとともに率先して読者一般の月報への蒙を啓くようになったのである。<sup>21</sup>

■ 1928（昭和3）年2月25日～1930年2月15日 ■

⑪ 『現代長篇小説全集』 全24巻 新潮社 1圓。

〔月報〕：「長篇小説月報」 全24号 《二つ折り / 菊判（220 × 156） / 8頁》。但し第1号は4頁。

自社が大ヒットさせた④『世界文學全集』（1927～32）に11ヶ月遅れて、新潮社は日本文学方面でも圓本スタイルの全集をスタートさせた。現代の長篇小説のうち他社の全集が取りこぼしたような作品をターゲットにして50余篇を収録した編成が奏効して、⑤『現代大衆文學全集』（1927～32）と同じ路線の全集でありながら、248,000部の予約を集めて上首尾であった。<sup>22</sup>

その第17巻『田山花袋篇』（1929年8月1日）に添えられた「月報18」を

<sup>21</sup> 最近も、直近3種の岩波版「漱石全集月報」（1993～2004）から3分の1の記事を精選した『私の漱石』（岩波書店、2018）が刊行されて、例えば漱石の雅号を用いた文人が過去に数人いたという驚くべき事実をフランス文学者の奥本大三郎に教えられた。

<sup>22</sup> 『島崎藤村篇』（1929年7月）の印税が24,800圓と『新潮社100年』（1996）のp. 141に、

開くと、徳田秋聲、加藤武雄、宮島新三郎らが花袋に触れた3頁半分の記事があり、続く2頁弱の花袋自身による「私の歩んで来た道」は読み応えがあった。更に次回配本の予告記事が約1頁で広告が2頁分の構成になっている。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 70-76. 解説用に青山（1984）がpp. 77-94に転載されており、pp. 84-86に巻別配本順を見ることができる。

■ 1928（昭和3）年2月15日の初回配本には月報無し、

第2回配本以降添付：4月3日～1931年6月15日■

⑫ 『世界大衆文學全集』 全36→54→68→80巻 改造社 各冊50銭。

【月報】：「世界大衆文學全集月報」 全44号？ 《四つ折り／四六判（186×127）／4～16頁》。

当初予定していた36巻分については『改造』第10巻3號（1928年3月1日）の巻末に内容見本が綴じ込まれている。初回配本の第2巻『家なき兒』（2月15日）は〃月報なき巻、であったが、第2回配本の第4巻『ルパン』（4月3日）からは挿み込まれるようになった。但し、1929年2月3日の第12回以降は2冊組1圓にして配本されるようになった。上製本ながらも文庫本サイズだったからであろう。結局⑫では都合3回の増巻が行われて全80巻で完結し、月報は44冊あったろうと青山（1990<sup>2</sup>）により推定されている。

第7回配本の第13巻『アンクル・トムス・ケビン』（1928年9月10日）添付の「月報6」では、8頁ちゅうに広告が3頁弱もあり、記事は原著の「出版當時の評判」と収録作品の梗概くらいで、これでは読み（読まずに）捨てられてもやむを得なさそうで、⑫では月報の残存部数もあまり期待できないであろう。しかし第22回配本の第25巻『平妖傳』（1929年12月13日）添付の「月報21」を読むと、広告は16頁ちゅう1頁のみで、記事は幸田露伴の「平妖傳のこと」、江戸川亂歩の「暗黒政治の魅力」、次回配本作品の訳者による解説文2本、そして第一次増巻18巻分の予告が各巻400字弱で解説されていて、な

かなかの情報量を示している。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>） pp. 240-245. 但し、青山が入手し得た26号分のみ。

■ 1928（昭和3）年2月5日～1929年4月30日 ■

⑬ 『岩波講座世界思潮』 全12函 岩波書店 各函1圓20銭。

【月報】：「岩波講座世界思潮月報」 全12号 《四六判(185×125)/2～8頁》。

菊判50頁前後の冊子7～8冊と月報が収められた函が圓本並みの価格で毎月配本された。『岩波書店八十年』（1996）は「多数の執筆者の協力を組織して体系的に問題を整理し、分冊出版するという形式も、この講座によって定式化された」（p. 49）と、嚆矢的な販売方式を採用した「講座」であったことを明らかにしている。

そこで⑬の内容見本を読むと、「現代に於て苟も自覺的に生活し、積極的に行動せんとする者の誰もが知らねばならぬところの過去及び現在の歴史の動力であるが如き思想」を「主潮、～「思想家、～「傾向と運動、の各部門において「その方面の研究に於て最も信頼すべき人々」が明快にして平易なアウトラインを示すべく編集されたと謳われている。喩えるならば「岩波通信大学講義録、といった性格の冊子集であろう。すると、月報も講義中の（高尚な）脱線や（訂正用の）掲示板などとして機能したことになる。単位認定や学位取得には結び付かないが、購読者は現在に換算すれば3,000円近くを毎月出費して、幅広い学問領域にわたる啓蒙的な冊子を週2冊平均で読みこなすと想定されていた計算になるから、年間に1冊の本も読まない大学生が4割もいるらしい現代とは何たる向学心の違いか！

その頃、岩波書店は社会科学系や自然科学系へと快調に「講座、のレポーターを抜けており、1931年6月10日には『岩波講座日本文学』全20巻（＝函）

もスタートさせていた。その初回配本に挿み込まれた「岩波講座日本文学附録 1」は、執筆規定や編集理念を表明した四つ折り（232 × 155）の 8 頁でしかなかったが、翌月の 15 日には、谷沢（1979）が教えるところに拠ると、

第二回配本に至って付録《文学》創刊号を、本文六十五頁の堂々たる雑誌として添付したのである。このままでは配本回数と号数がずれるので、第三回配本添付を「第二・三号」合併号形式とし、以後第二十号まで全十九冊を刊行した。しかも講座刊行終了の同年同月、昭和八年四月には、独立の月刊雑誌《文学》を創刊するという手廻しのよさ…（p. 36）

つまり『岩波講座日本文学』の「附録」は第 1 号だけで終わりにされ、第 2 回配本からは（月報と呼ぶよりも）本格的な雑誌「文学」が第 1 号としてスタートし、講座完結時の 1933 年 4 月 20 日には、「文学」も第 20 号（実質 19 冊）を積み上げていた。しかも同年 4 月 1 日には、それまでの実績を継承させた新たな商業誌『文学』を第 1 巻 1 号として再スタートさせて今日に及んでいる。確認のため、『文学』第 51 巻 1 号（1983 年 1 月 10 日）の巻末に「総目次」で確かめると、月報であった頃の「文学」が別建てで目次化されており（pp. 2-5）、この頃の執筆者名は「執筆者別索引」（pp. 171-145）に混ぜ込まれていた。読み捨てられるはずの月報は岩波書店の努力で、iPS 細胞が生長するように、ISSN 付き定期刊行物へと成長したわけである。

■ 1928（昭和 3）年 3 月 25 日～1933 年 4 月 22 日 ■

⑭ 『日本戯曲全集』 全 50 → 68 巻 春陽堂 1 圓 → 1 圓 50 銭（1931 年 10 月の増巻以降）。申込金が一部および二部に各 1 圓。

〔月報〕：「日本戯曲全集月報」 全 50 → 68 号？ 《二つ折り / 四六倍判（240 × 181） / 2～4 頁》。

第一部：歌舞伎篇 第1～32巻＋（1931年から）増巻第33～50巻。

第二部：第33（現代篇第1輯）～50巻（第18輯）。

両部で毎月1冊ずつ配本が予定され、第一部は順調に配本し続けて、第二部は予定からやや遅れた1930年4月に完結。結局1933年4月までに全68巻が完結した。「月報」は第一部用と第二部用が別個に制作されたようであるが、具体的詳細は不明。

「三百年にわたる未刊の歌舞伎脚本を整理統一し、國劇樹立時代に當る今日の戯曲を併せ盡す」（内容見本）とする遠大な計画の下に⑭は389本の脚本を集成していた。第二部すなわち「現代篇」についても、「一八巻に収録された各作家の戯曲をながめわたすことは近代劇研究の出発点」になると、『日本近代文学大事典』第6巻（1978）は学術性を評価（p. 81）。

■ 1928（昭和3）年3月10日～1931年1月20日 ■

⑮ 『新興文學全集』 日本篇 第1～10巻＋外國篇 第11～24巻 平凡社  
1圓。

⑯ 『月報』：「新興文學」全22号 《四六判/64頁》。

筆者（藤井）には全くもって未知の全集であり月報も未見なのであるが、青山（1987）が取り上げていたので取り敢えず内容見本を入手してみた。それには、プロレタリア文学に留まらず、「内外に於ける藝術的革命の先驅者より現文壇の最前線に立つ新進作家に至る一百六十七人の代表的創作三百三十餘篇。悉くこれ潑瀾たる社會精神の反映であつて、舊文學の腐屍殘骸は一篇も含んでゐない」との高邁な編集方針が宣されており、平凡社なりにこの企画の独自性を主張しているようであった。文学に「新興」を銘打ったのも、大正末～昭和初に台頭したプロレタリア文学と前衛的新感覚の文学を既成の文壇に対峙させようとの意図があつてのことらしい。

もっとも『平凡社六十年史』（1974）は⑮の成果について、「もう一、二年遅

く企画されれば、あるいは爆発的な人気をよんだかもしれない。ナップ成立前後のあわただしい状況の中で、よくこれだけの幅のひろさをしめすことができたと驚くばかりだが、蓋をあけてみると案外ふるわなかった。」(p. 104)と総括している。なお、ナップとは全日本無産者藝術聯盟のこと。

月報「新興文學」は64頁建てで、「毎號全無産階級文藝陣の共同戦線たるべき雑誌」(内容見本)を標榜して意気盛んであった。『日本近代文学大事典』第6巻(1978)によると、「日本篇の各巻に付された作者執筆の略歴、小伝は有益」であるためにプロレタリア文学方面での「研究の基礎文献の一つ」に目されてもいるらしい(p. 78)。しかし、月報、ではあっても第4號(1928年7月)と第20號(1930年6月)が「その筋から頒布を禁止された」くらいなので、取り扱いが厄介と「新興文學」自体が敬遠されたとすれば、8,000部発行されていても現存する部数は多くないであろう。ネットの「日本の古本屋」に出品されていた「新興文學」は一冊が4,000円前後していた。

【月報細目】：青山(1990<sup>2</sup>) pp. 194-203. 青山(1987)も pp. 204-208に併載。

## ■ 1928(昭和3)年6月5日～1930年5月30日 ■

⑩ 『現代ユウモア全集』 全12→15→24巻 現代ユウモア全集刊行會 1圓、申込金を第12回配本の第1巻代金に充当して、第13巻以降は分売。

〔月報〕：「現代ユウモア月報」 全24号 《四つ折り/菊判(232×158)/8頁》。

筆者の手許にある「月報」はすべて四つ折りにされたままでチラシ並みの粗末さである。世界的大不況のため沈滞した世相にあって読者の気持ちを引き立てようと奮闘したユーモア文壇の面々が、(巻順に並べると)坪内逍遙/堺利彦/戸川秋骨/長谷川如是閑/生方敏郎/佐々木邦/岡本一平/正木不如丘/近藤浩一路/大泉黒石/高田義一郎/牧逸馬/田中比左良/細木原青起/水島爾保布/佐々木邦/麻生豊/徳川夢聲・岡田時彦/池部鈞/吉岡鳥平/東健而/牧逸馬/佐々木味津三/[保積]稻天・[長崎]拔天とあっては、収録作品のほ

うも気になってくる。

第7巻『岡本一平集』（1928年8月31日）の「月報3」（30日付）は、次回配本の第12巻『牧逸馬集』を宣伝して、「…その話に依ると、氏が鬚物を書く前後、岡本綺堂の作品を、恰もバイブルの如くに讀んだと云ふ」と、内輪話を披露してくれている。また、「月報11」（1929年4月10日）と「月報12」（5月10日）とが連続して逍遙のユウモアを取り上げて目を惹く。

ユウモア文学では人気のある顔触れが揃い踏みしていて好感されたのか68,000部の予約を集めて、『小学館五十年史年表』（1975）によれば、「この全集の大成功によって、経営基盤はいよいよ堅固なものになり、社の知名度も一挙に高揚」（p. 35）して、16は小学館における「最初の文芸出版」（p. 7）と見られるようになった由である。それで本体は現在でも比較的多く見るが、チャシ紛いの月報を保存している古書は残存が少ない。

#### ■ 1930（昭和5）年10月20日～1931年8月10日 ■

17 『佐々木邦全集』（第一次） 全8→10巻 大日本雄辯會講談社 1圓50錢。

18 『佐々木邦全集月報』 全10号 《二つ折り／菊判（214×148）／8～12頁》。

以前に佐々木邦の人物像を調べたとき<sup>23</sup>、彼が大衆作家であったためか研究書が少なく、しばしば月報に情報を頼ることになった。例えば、「月報6」（1931年4月10日）に邦が寄稿した「私と煙草」を読んだら、英文学が発展した功績を彼はWalter Raleigh（1554-1618）に帰していた。煙草を新大陸から英国にもたらせた人物に事寄せるとは、愛煙家の邦らしい卓見と印象に残った。あるいは「月報3」（1931年1月10日）の「英國のユーモリスト」で、彼は

<sup>23</sup> 「英語教師としての佐々木邦」を『人文論叢』第47巻4号（2016年3月）に投稿した。

Charles Dickens の *Pickwick Papers* (1836 ~ 37) に触れて、「疾うに日本語に移植されるべき筈のものだが、恐らく譯者があるまい。餘程英語の力がある上にヂツケンズに近い人でないとあの長篇に盛[ら]れてゐるユーモアの全幅が分らない。」と気炎を吐いていたが、何てことはない 20 年前に自身で抄訳して出版していたのだから、こんな風にして英語力とユーモア感覚で手前味噌を並べるところはいかにも邦らしく、また微笑ましくもあった。<sup>24</sup>

事例④にも挙げたが、戦後になってからも講談社は⑬以降発表の作品で『佐々木邦全集』を全 10 巻 + 補巻 5 に編成して 1974 ~ 75 年に刊行しているが、その補巻 3 の「月報 13」(1975 年 10 月)に石塚雅子が「祖父の目」を寄せて、「祖父の作品の中によく一言居士や学校の先生が、言葉の講釈をする場面が出てくるが、祖父自身が時々、こういう人物そっくりになった。…もともと祖父の場合は、作中人物のように雄弁ではなく、ポツポツとそれもうれしそうに目を輝やかせて話す…」と、近親者の眼で晩年の邦を描出している。これも貴重な証言になるが、再録の機会に恵まれなければ逸文になってしまうのであろうと危ぶまれるのである。

■ 1930 (昭和 5) 年 10 月 1 日 ~ 1932 年 3 月 10 日 ■

⑩ 『小泉八雲全集 學生版』 全 15 → 18 巻 第一書房 1 圓 50 錢。

⑪ 『月報』: 「小泉八雲全集月報」 全 18 号 《二つ折り / 四六判 (184 × 130) / 4 ~ 8 頁》。

⑩より 4 年前の 1926 年 8 月 ~ 1928 年 1 月に、「假に今日地球上の文化人にして先生の盛名を知らないものがあるならば、それは先生の同國人たる日本人ばかりであらう」(内容見本)と挑発的な惹句と共に、菊判背革装全 18 巻の『小泉八雲全集』を各冊 4 圓 80 錢で刊行したのは、⑦に向けて奮闘中の第一書房

<sup>24</sup> 『ピクウィック俱樂部物語』内外出版協會 1913 年 9 月 15 日。全 57 章中第 34 章迄。

社社長谷川巳之吉であった。彼は、田部隆次、大谷正信、落合貞三郎たち Hearn の教え子を 12 人呼集して、Houghton Mifflin 版 *The Writings of Lafcadio Hearn*, 16 vols. (1922) の収録作品、および帝國大學での文学講義、新聞に執筆した記事などを片端から邦訳させていた。

1926 年の「豪華本」には月報が作られなかったが、長谷川は大損しながらも圓本ビジネスの修羅場を潜り抜けてきた経験を活かして、手持ちの『小泉八雲全集』を四六判 1 圓 50 錢に化粧直して『學生版』<sup>18</sup>として再刊、捲土重来を図った。すなわち、「現今の如き俗悪本の横行する出版界」に「新鮮な傾向を誘導せん」（内容見本）との高邁な理念のもと、当初の企画では全 15 巻、しかし最終的には 18 巻に既訳の全作品を収録して二匹目の泥鰌を当て込んだ。当然のことながら、圓本には必須の月報が制作されて<sup>18</sup>に挿み込まれることになった。

幸いにも<sup>18</sup>は成功したようで、味を占めた長谷川は三匹目も狙った。すなわち 1936 年 11 月 27 日～1937 年 11 月 20 日に、全 12 巻の『家庭版』を価格据え置きで再刊したからである。<sup>25</sup> それに伴って、新編集の「小泉八雲全集月報」が《二つ折り / 四六判 (188 × 129) / 8 ～ 16 頁》の仕様で 12 号分用意されたが、『家庭版』の「月報 1」（1936 年 11 月 27 日）には「従来の内容と趣を變へ、いままでに發表された先生に関する研究や追憶をできるだけ廣く集め、この機会にアンソロジーとして残したい」（p. 15）との新機軸が打ち出されている。

ここでまた脱線になるが、月報が始まったとされる 1926 年前後から対米開戦の 1941 年に至る時期に月報付き個人全集をネットの「日本の古本屋」に拾ったところ、西欧文人の著作集を約 20 件数えることができた。ところが英語を

<sup>25</sup> 一般家庭には馴染みの薄そうな『書簡集（一）』～『書簡集（四）』、『詩論』～『詩論續々・文學史論』の巻は「家庭版」に収録されなかった。

母語とする文人の全集が少ないことに意外の感を覚えた。『小泉八雲全集 學生版』<sup>18</sup>、同『家庭版』と、1933年に配本が始まった<sup>19</sup>『新修シェークスピア全集』くらいしか見られなかったからである。

英語圏＝仮想敵と見做す風潮の昂りもあったろうが、当時の読書人で海外作品の全集を購入するほどの知識層であれば、ほとんどが旧制中學校～高等學校で「読める英語」を仕込まれていたはずなので、諸外国の作品も図書館の英訳本や仲間内で融通し合った英書を読んでいたのではなかろうか。<sup>26</sup> 取り分け読み馴染んできた英語作品の場合には、話題に上るような邦訳でもなければ全集に食指を動かされる読者は少なかったであろうし、そうなれば版元も採算部数を見込めないことになる。故に<sup>18</sup>と<sup>19</sup>の登場は当時における評価と関心の高さを裏付けていることになろう。英語以外の外国語による作品については、英訳でなく原語から邦訳されていさえすれば、少々きこちない訳文であっても注目され歓迎もされて、刊行実績として約20件をカウントできたのであろう。閑話休題。

#### ■ 1933（昭和8）年9月20日～1935年5月25日 ■

<sup>19</sup> 『新修シェークスピア全集』 全40巻 中央公論社 菊半截（文庫本のサイズ） 2冊1圓。但し、予約販売終了後は各冊70銭で分売された。

〔月報〕：「沙翁復興」（Shakespeare Renaissance） 全20号 《菊半截判（149×109）/32～64頁》。他に付録が2点あった。

<sup>19</sup>は坪内逍遙（1859-1935）にとって二度目の William Shakespeare（1564-1616）全集の邦訳であった。すなわち1909（明治42）年～1928（昭和3）年に、早稲田大學出版部が全40巻で完結させていた『沙翁全集』を、逍遙自身が Nonesuch Press 版に照らしながら改筆を施して中央公論社から再刊した「新

<sup>26</sup> 芥川の「平田先生の翻訳」（1925年4月？）に「英語の普及してゐる為に却て英吉利文芸を軽視する」とある。『芥川龍之介全集』第12巻 岩波書店 1996年 pp. 168-170。

修版、のことで、40冊を20函に収めて函毎に月報が添えられた。

「沙翁復興」とは別に、第5回配本（1934年2月1日）に際して菊半裁判184頁の付録「シェークスピア入門」が、更に第14回配本時（1934年11月3日）にも四六判30頁の付録「沙翁畫帖」（8日付）が添えられた。また本体の第40巻目である『シェークスピア研究栞』（1935年5月15日）は、逍遙が執筆した早稲田大學出版部版『シェークスピア研究栞』（1928年12月3日）に、弟子も協力して約100頁が増訂された改訂版であった。

【月報復刻】：『沙翁復興：復刻版』名著普及会 1990年5月20日。菊半裁判からB5判に拡大し、『シェークスピア入門』と『沙翁畫帖』も収録複製した一冊本で、各號の目次頁が前付けに集められ、「執筆者一覧」も作成されている。

【付記】：坪内逍遙（譯）『シェークスピア全集』は1957～59年にも新樹社から全39巻および『シェークスピア研究栞』として復刊されたが、全39号の月報は《B7判 / 6頁前後》で新たに制作された。

#### ■ 1939（昭和14）年12月26日～1943年3月20日 ■

⑳ 『新日本文學全集』 全19巻（←予定27巻） 改造社 1圓50銭。

【月報】：「新日本文學全集月報」 全19号 《二つ折り / 菊判（216 × 147） / 4頁》。

『日本近代文学大事典』第6巻（1978）によると、圓本ブームを巻き起こした③の再来を当て込んだ改造社は、「昭和の新文学を集大成する全集」として全27巻でこの企画を発表したが、ブームは既に沈静化しつつあった。また「時局の進展にともない、とくに旧プロレタリア関係者を含めることが困難」（p. 116）な状況もあって、第5、7、12、13、15、22、23、27巻の刊行は自粛することにして、結局全19巻編成で⑳は完結された。

青山（1990<sup>2</sup>）作成の細目を参照すると、19号ちゅう17号分で月報の執筆者が各1名しか居らず、月報に執筆した計21名のうち5名は⑳に作品を収録

された作家でもあった。各号とも次回配本の収録作家を論じた記事で統一されており、最終号の記事から第5巻は瀧井孝作・堀辰雄集が検討されていたと判かる。地味な構成の月報ながら、例えば「月報4」（1940年5月20日）では深田久彌が、岸田國士の描く若い近代的感覚の女性主人公には世間的な意味での聡明さが欠如して味があると評して味がある。また「月報17」（1942年9月1日）では、伊藤整が同世代の同業者的視線で林房雄の『青年』（1932～33）を是々非々で紹介している。

曾根博義の『『新日本文学全集』と戦争下の出版状況』は、1937年7月の「支那事変勃発以後、用紙難にもかかわらず新刊書の点数は減る気配を見せず、一冊あたりの売れ行き部数も増えつづけたこと、とりわけ文学書の需要と供給が著しく増えた」（p. 111）ことなど、当時に対する我々の想像に反する現象を指摘している。それで第10巻（1942年9月1日）の奥付を見ると、113,000部印刷の用紙が割り当てられたようであるが、販売価格を制限した<sup>㊦</sup>印もあって内地での供給不足を窺わせるので、宣伝用の数字か、戦地向けに印刷されたのかも知れない。兎にも角にも<sup>㊧</sup>が改造社にビジネス・チャンスをもたらせたようで、1年半後には河出書房もあやかろうと『三代名作集』<sup>27</sup>で後追いしたが、筆者（藤井）が囑目できた『徳田秋聲』巻の奥付には20,000部印刷とあった。

【月報細目】：青山（1990<sup>2</sup>）pp. 104-105. 各巻の配本順リストおよび曾根の論文（pp. 106-118）を併載する。

青山（1990<sup>2</sup>）が「月報細目」を作成してくれた全集のほとんどを骨子に用いて、筆者（藤井）の判断で加えた戦前期の圓本と文学系全集を併せた<sup>㊨</sup>～<sup>㊯</sup>により、発生期における月報の輪郭をほぼ時系列で俯瞰できる材料を示し得た

<sup>27</sup> 明治～大正～昭和に跨がる作品集で、やはり青山（1990<sup>2</sup>）の記述（pp. 226-228）によると、1941年5月19日～1943年9月20日の期間に23回までは配本があったらしいが、細目は19号分のみしかない。

と思う。そしてここまでの執筆過程で筆者なりに認識するようになった`月報、にまつわる留意点について、次の章で幾つか話題にしてみたい。

## 月報をめぐる諸問題

`月報、には、それを挿み込んでいる本体に比べると扱いにくい部分がかかなりあることは上述した端々から窺えようが、本稿の締め括りとして、月報固有の諸問題について論及しておきたい。

そもそも月報はチラシ同然に販売促進手段のひとつとして配付されたので、読み捨て御免の紙質に両面印刷され、二つ折りか四つ折りしただけで本体に挿み込まれていた。それでいてノンブルが付される場合が多いことから<sup>28</sup>、版元の側も単なる広告とは区別して編集したと想像される。もし第一面の見出しが購読者の眼を惹けば、ポイ捨てしようとする手を暫くの間にしても止められるかも知れない。しかし発生期の月報にあっては殊更に、版元～執筆者～読者のどの側にも保存されるべき資料としての意識は希薄であったろうから、そうした印刷物では袴を着けた論考よりは着流し風の気楽な短文が歓迎され、編集者としても腕の見せ処であったかも知れない。手練れの執筆者ならばその辺を心得たうえで調子良く書き流すとか、意表を衝いた話題をぶつけて読者の反応を瀬踏みもできたであろう。

月報を消耗品と見る感覚は戦後にも持ち越されており、例えば編集者の古山高麗雄は1950年頃の雰囲気を捉えて次のように回顧している。<sup>29</sup>

---

<sup>28</sup> 反対に、『トインビー著作集』（社会思想社、1967～68）の月報は第1刷にも、合本化された第2刷（1975）にも一貫してノンブルが見られない。

<sup>29</sup> 『野上彌生子全集』第Ⅱ期第10巻（岩波書店、1988年1月）の「月報15」に掲載されていた「野上弥生子先生と私（ソノ一）」より引用した。

林芙美子に、全集の月報を書いてもらおうと言って、先輩の社員に笑われたことがあった。

「大家だよ、林芙美子は」

「大家に、月報の原稿を頼んではいけないの？」

「林芙美子が月報になんか、書くわけがないじゃないか」

月報のごときに、林芙美子のごとき大家に執筆を依頼しようという発想は、ものを知らないにもほどがある、ということらしかった。…むしろ私は、月報にも大家を、という方向で考え続けた。それはしかし、河出書房では現実的でなく、私は現実に鈍感だったので、うだつが上がらなかったのである。

こうした遣り取りは今でも編集会議で耳にしそうである。何しろ月報の文章では枚数が少なく、改版になれば容易に差し替えられてしまうだろうし、そうなれば折角の文章も見失われて埋もれてしまいかねない。よほど原稿料を弾まなければ大家に執筆を仰ぎ難いことは、業界内の人間でなくとも想像できる。

ところが月報という習慣の無い海外では、ネガティブな先入観よりもむしろ物珍しさの方が勝ったのか、Michael P. Williams という米国 Pennsylvania 大学図書館の司書が 2013 年に論文を発表して月報を好意的に紹介していた。<sup>30</sup> 月報に資料的可能性を見抜いた彼は月報記事を再編集した単行書を自館の所蔵書から何点か探し出してきて、日本独特の `geppō、が潜在させている学術性の証左としている。

再刊された実績を尺度にして月報を評価する方法はなるほど明解ではある。しかしそれらの書名は、過去一世紀間に大量に制作されてきた冊子のうちの極く一部に対する出版社サイドでの算盤勘定の結果を覗かせてはいても、執筆者

---

<sup>30</sup> その存在を `Wikipedia、ちゅうの箇にして要を得た項目「月報」から教えられた。

が月報を好意的に捉えていたとか読者一般が月報を重要視していた証拠とまでは見做せないように思われる。例えば、Williams が挙げた石川淳の『前賢餘韻』（岩波書店、1975）では、その主要部分（pp. 1-316）を「鷗外全集月報記事」としているが、何処の出版社の何次全集添付の月報で何号何頁に掲載されていたかを明示していない。<sup>31</sup> 初出の場とはいっても月報は一時的な発表媒体でしかなく、単行書に収録されて初めて業績に認定されるとするかのような権威主義的な意識が著者か編集者の側に働いていたのであろう。

月報記事ならではの価値を個々の冊子に求めるのであれば、ネタの使い回しに長けたプロの「物書き」の仕事も然る事ながら、単行書に再編集されそうもない知名度ではマイナーな執筆者が残した記事や、乞われて鉛筆を舐め舐め文章を捻り出してくれた善男善女の貢献が蔑ろにされてはならない。本稿の始めの①～③にも見られるように、多方面から向けられる多様の視線が月報記事を面白くするのであり、常連の執筆者なら見逃しそうな目新しい情報も提供して値打ちを上げているのである。つまり単行書には転載されそうもない記事に一期一会の発見や邂逅を期待できる場が月報なのである。<sup>32</sup>

多様な執筆者による多様な記事の集合体である月報を再読に備えて保存しようと試みた具眼の読者は、少数ではあったにしても月報発生の当初から存在していた。個人の手によって装幀された②「近代日本文学大系月報」（1926～28）や③「岩波講座世界思潮月報」（1928～29）の合冊本を筆者も入手していることから判る。そうした気運が募ってくれば、次は出版社の出番である。そして月報保存の「風潮」が高まっていく。その時期については既に本稿（p. 29）で引用した谷沢（1979）による指摘が具体的で、1935年頃から月報の

<sup>31</sup> 岩波書店の第三次『鷗外全集』全38巻（1971～75）の月報に連載された、石川の鷗外論の掲載先を知らぬようでは鷗外を読むなぞ論外だと突き放された気分させられる。

<sup>32</sup> 岩波の最新版『定本 漱石全集』第1巻の「月報1」（2016年12月）を単独で執筆しているのは自称「パンク上がりのぬらりひょっとこ」で、執筆者の多様さを印象付けられる。それだけにまた、内容の吟味に読者の見識も問われることになる。

保存を意識する読者の人数が増加して、機を見るに敏な出版社をして月報の製本を請け負わせるほどの影響力を行使するまでに成長し始めたことを示唆する。つまり月報の登場に10年ほど遅れて、「月報重視の風潮」もスタートしたことになる。

こうした「風潮」は戦後になって更に顕在化したようで、月報の合本化では実績を積んできた岩波書店や筑摩書房に倣おうとする事例が散見されるようになった。例えば、1952～55年の『昭和文學全集』では角川書店が「同じ装幀の綴り込みカバー」を希望者に有料で送付して月報保存への便宜を提供した。講談社が1966～70年に刊行した『吉川英治全集』から月報が生誕百年を記念して『吉川英治とわたし』の書名で1992年に合本になった。1971～74年には講談社版『現代の文学』が別冊の『月報』を特典として配布している。古山が勤めていた河出書房新社も1988年には『横光利一全集月報集成』<sup>33</sup>という模範的な合本を保昌正夫の編集で実現させるなど、「月報重視の風潮」が徐々に定着していった。やはり先述した講談社学芸文庫が過去に制作した月報を積極的に再活用するようになったのも21世紀になってからであった。

併行して、研究者も月報の可能性にほつほつ言及するようになったとの印象を筆者は得ている。青山毅は「月報と私」(1978<sup>2</sup>)で「月報に異常なほどの興味と関心を抱くようになったのは、ここ六、七年のことである。作家の著作目録を編んでいるとき、月報や内容見本の類が、かなり重要な意味を持つということに気がついたからである」と書き残していた。青山は1940年の生まれで1994年に死去していたから、逆算してみると1970年代に月報への興味に覚醒したと推測される。彼より一世代先輩の谷沢永一(1929-2011)は文藝冊子類を網羅的に収集していたから、月報に着目した時期については「文献目録編纂

---

<sup>33</sup> 過去の『横光利一全集』の月報。すなわち非凡閣版(1936)、改造社版(1948～51)、河出書房版(1955～56)、河出書房新社版(1981～87)から全号を複製し、それに内容見本その他の資料を加えている。

覚書」(1974)より更に遡れるはずである。そうしたなかで、月報を乗くらしいにしか見てこなかった1950年生まれ筆者にあっては、八重洲ブックセンターで『世界文学大系 月報合本』(筑摩書房、1969)という1,288頁の大冊を手にとって初めて月報の迫力に驚かされたのは1980年頃と記憶する。事程左様に大勢の読者が月報に親しんできたであろうが、英文学畑に身を置いてきたせいか筆者の視野には改まった月報論のような研究は入ってこなかったように思う。

目立つことがなく極めて地味な存在でもあった月報は、戦後になって(漸進的な紙質の向上にも窺えるように)存在感を書誌的な面でも増すようになった。谷沢や青木たち書誌学者や日本文学研究者の地道な貢献があったからで、角川書店が『昭和文学全集』(1952～55)に添付した月報は「主要研究書目・参考文献」欄を掲載するようになったし、筑摩版『現代日本文学全集』も「月報15」(1954年7月)～「月報97」(1958年9月)では吉田精一執筆で2頁の「研究書目・参考文献」を追加して文献情報での速報性を発揮するようになった。それで谷沢(2003)は後者を「形式も整って力が入っている」(pp. 323-324)と称賛していた。青山(1980<sup>2</sup>)もまた、1968年3月に花袋全集の〘月報細目〙を筑摩書房版『明治文学全集 67 田山花袋集』に発表していた和田勤吾の「先駆的作業」(p. 56)に意表を衝かれて畏敬の念に捉われた由である。

ところで郡司勝義は戦後刊行の『透谷全集』や『二葉亭四迷全集』に触れて、「その完璧を高く評価されたものであつた。しかし、それも二十年しか持たず、少しづつ難点が論議されてきた。思へば、個人全集の寿命は、そのあたりが限度なのであらう」との所感を1991年に示したが<sup>34</sup>、その発言は月報の在り方について示唆するところがある。すなわち次の全集が出版されるにしても、それまでの「二十年」ほどの間には研究は進んで文献も増えるものである。そこで、

<sup>34</sup> 『中島敦全集』第2巻 筑摩書房 1991年11月30日 p. 689. 『全集』の初版(1976)から15年目になる第12刷(補遺版)に添えられた「補遺あとがき」より。

差し換えの利く月報は文献情報の暫定的な掲示版としての機能も発揮できるようになる。であればこそ谷沢（2003）も、筑摩の『現代日本文学全集』（1953～59）から巻次を時代順に並べ直した『定本限定版 現代日本文学全集』の『別巻3』（1967）すなわち944頁に合本化された月報集を「書誌の系譜に記録されるべき取り計らい」（p. 324）と称賛したのである。

やや極端な事例になるが、それ以上の存在感を醸成させる月報もある。岩波書店が1973年11月～76年3月に刊行した『鏡花全集』全38巻+別巻1の月報は、1986年12月の再刊でそっくりそのままにリプリントされた。なぜならば、『別巻』の本文に月報記事を踏まえた論述もあって、月報が本体と不可分の資料になっていたからである。

このように月報の有用性が認識されてくるにつれて、目敏い古書市場は残存の少ない発生期の月報類に対して商品価値を見出すようになってきたようで、戦前のセット物では月報の有無が売価に大きく撥ね返っていることが実感される。時には、月報だけを集めて場所塞ぎの本体は処分したのではないかと思わせる値付けにもお目に掛かるくらいである。いっぽう図書館では（一般的傾向として）月報を簡便に閲覧できる手段が乏しく、月報の残存状況を把握できていないOPACが殆どである。そうした環境にあっては、月報の可能性に目覚めた研究者や読書家が何らかの記事に辿り着こうとすると、相応の予備知識+努力+熟練そして幸運に恵まれることが必要になってくる。

前述のWilliamsは、日本の国会図書館が月報保存のガイドラインを2001年7月に変更した事実を踏まえて、それが自館の収蔵書にどう適用されているかを实地に確認しようと、2001年10月に刊行が開始された全30巻の岩波版『新日本古典文学大系：明治編』（～2013）でチェックしたそうである。その結果、受け入れ担当者によって処理法がマチマチであったという混乱した実状を太平洋の彼方から報告している。こうした状況にあって月報を現物のまま管理する

のは非現実的と判断した Williams は、月報という学術的資料を散逸させたり存在が見過ごされたりしないように書誌情報をデータベースに取り込んで管理と利用を効率化するプランを提言している。

いよいよここから、実際に月報を取り扱うにあたって注意すべき諸問題を具体的に記すことになる。まずは、本体に挿み込まれるだけの月報は容易に行方不明になるという、形態に起因する問題から入ろう。ほとんどが折られるだけで綴じられていないから、残っていると思っても途中の丁が抜け落ちていたりする。他号の丁と入れ替わっていることさえある。時にノンブルが無くて全頁が揃っているか覚束なかったりもする。例えば、[\[8\]](#)における「春陽堂月報 29」（1929 年 10 月）では第 8 頁の最後で文が終わっているために、在るはずの半ペラ（9-10 頁）が見落とされ易いと谷沢（1978）は注意喚起をしていた。先述の筑摩版『現代日本文学全集』においても、「附録 15」（1954 年 7 月）に「読者寄稿と参考文献のために二頁増しました」の一行を読み落とすと、ノンブル無しの半ペラが無くなっても気付かないであろう。また『永井荷風作品集』第 5 巻（創元社、1951 年 2 月 28 日）の「附録 5」には木村莊八による 4 頁の挿絵集が挿み込まれているが、「附録 5」はその存在に言及していない。

月報の刊記に関わる問題も要注意である。曖昧であったり、不正確であったり、意図的に（しかも無断で）変更されていたりと、読者を惑わすこと甚だしいからである。初版に際しては発売が巻順でない方がむしろ普通であるが、本体巻が第何巻であっても月報は発行順にナンバリングされるので、月報の号と本体の巻は別個の序列と考えておくべきである。<sup>35</sup> 不注意な読者はこうした乖離を殊更には意識していないかも知れない。現に筆者（藤井）は無知故に本体の巻順で月報を製本するという愚行を犯したことがあるし、古書店から同様な

<sup>35</sup> 『井伏鱒二自選全集』（新潮社、1985～86）の月報には号表示が無い。月報は本体に付属するのが本来と見れば、月報の横繋がりを想定する号次は後発的な表示法とも言えよう。

製本例を購入したこともある。ところが一旦完結して再刊になると本体が巻順に発売されるのが一般的で、付随する月報の号次が本体の再発売順に変更されてしまうことが多い。つまり同じ月報でも号次が異なることになるため、引用や参照に際しては出典表示に不統一を招くことになるのである。

本体の全巻数と月報の全号数が一致しない場合もある。その黎明期に時として初回配本時に月報が制作されなかった事例については③、④や⑫で見た通りで、月報の刊記には目を凝らさなくてはならない。当たり前ながら、複数冊が同時あるいは同月内に配本されることがあれば月報の全号数は減ずることになる。別巻や増巻に月報が挿み込まれないケースは今日でも散見される。しかし、月報が付属しない巻であることを出版社が親切に告示している例に筆者はお目に掛かったことがない。そうすると直接版元に問い合わせるか、本体を所蔵する(複数の)図書館に確認するか、現物を多く見てきた古書店の知見に頼ることになる。それでも「無い」との結論を得るのは容易でない。

同じ月報を再発行する際に版元が月報の刊記に初出時の号次や所属巻を併記しない場合が多いので、本体の再刊や増巻の経歴は月報の書誌的情報を曖昧にしてしまう。月報の再利用に熱心な筑摩書房の文学全集にそうした事例が見られたので、煩雑さを厭わずに例示してみよう。1953年8月～59年4月の①『現代日本文学全集』全97巻+別巻2は、1967年11月に巻次を主題の時代順に並べ換えて②『定本限定版 現代日本文学全集』全97巻+別巻2冊と『別巻3 月報合本』とでセット販売された。1973年4月にも全143巻に「増補」されて③『増補決定版 現代日本文学全集』として図書月販から再発売された。<sup>36</sup> 紛らわしいことに1968年8月～73年9月には、お藤元の筑摩書房が新編成の④『現代日本文学大系』を全97巻+別冊『現代文学風土記』で刊行した。

---

<sup>36</sup> ②『定本限定版』全97巻+別巻2冊+『月報合本』に、全38巻の『新選現代日本文学全集』(1958年10月～60年12月)から36巻分と、新編集の7巻を加えた全143巻編成。補巻43巻には月報が無い代わりに、収録作品の「目録」(28頁)が付属。

その際に①～③で月報が使い回されたのであるが、月報の号表示が変更されてきた流れを追跡すると、①では足掛け7年を要した本体の配本に沿って「月報1」から（『別巻1』・『別巻2』共通用の）「月報98」までが挿み込まれた。但し、各号を挿み込んだ本体の巻次が月報には表示されていないので、①の本体から離してしまうと月報の当初の所属先が判らなくなる。②への編成では①と同じ月報全98号を合本にして保存と閲覧の便を図ってくれたのであるが、①では途中増巻のせいで本体の第2巻から第79巻までが時代順を乱していたため、②では本体の巻次が時代順に並べ直された。それに連動して②の月報でも、本体の引越しに付き合わされて、ほぼ全冊で号表示が変更されている。そのため同じ月報でも①と②とでは号次が異なることになった。③も全143巻に混成されたため、呼集された月報に新しい号次が振り直された。②でも③でも月報の刊記は新しい号次しか表示していないから、参照する際には①に遡って初出での号次を確かめなくてはならない。

①が刊行されて15年にもなると新編成が求められる頃合いになったようで、筑摩書房は、他社に販売を委託していた②や③とは別に、新たに④を刊行し始めた。その際には月報も内容が一新されたので、極めて類似した名称を持つ全集同士でありながら、月報の内容・刊記での対応関係は①≠{②=③の第97号まで}≠④となったことを認識しておかねばならない。

以上のシリーズでは本体の判型が菊判（≒A5判）で統一されていた。ところが名称も類似した⑤『現代文学大系』が四六判（≒B6判）と小振りな本体で1963年9月～68年7月に同社から発行されているので要注意である。全69巻の⑤も配本順にナンバリングされた月報を挿み込んでいたが、完結後の1969年3月31日になって⑥『現代文学大系70月報合本』また1970年11月に『日本文学全集70月報合本』が制作された。⑤を踏襲した号表示を残して月報は本体の巻順で製本されたために、月報が号順に重ねられておらず不便が残るものの、⑤=⑥と共通して参照できる。ところが⑤のうちの50巻分をベー

スに残して新規に47巻分を積み上げて増補・拡大させた四六判全97巻の⑦『筑摩現代文学大系』が1975年5月～79年5月に刊行された。したがって新旧の冊子が混ざり合う⑦の月報では、本体である第1～97巻の新たな巻順に合わせて⑤とは異なる号次が振られている。この⑦は1981年12月15日に『愛蔵版…』として東京連合印刷からセットで再刊されており、その際に⑦の月報は⑧『別巻4』+『別巻5』の2冊に合本化されたので、内容と号表示の対応が{⑤=⑥}≠{⑦=⑧}の関係となる。書名がほぼ同じ①～⑧の月報は、サイズでも紙質でもレイアウトでもバリエーションが乏しいので、油断すると混ざり合ってしまうため一層気を抜けないことになる。<sup>37</sup>

次に留意すべき問題点は、月報と本体で発行月(日)にズレが生じ易いことである。月報では発行年と月を記して日までは明示しないのが普通である。<sup>38</sup> 月報は本体と異なるラインで制作されるであろうから、刊記に発行日まで印刷しても歩調を合わせて刊行できなければ本体の奥付との間に表記のズレを生じさせてしまう。発行月で揃えて済ませるのは月報らしい現実的な対応かも知れない。

そこで再び谷沢(1974)からの請け売りになるが、『露伴全集』全41巻(岩波書店, 1949～58)の月報は21冊において発行月が本体奥付と一致しないそうである。「甚だしきは月報が六ヶ月前の日付になつている場合さえある。…月報の記事を研究史的に取り扱う場合には、その月報が挿入されていた当該の巻の奥付と、一度は照らし合わせて見なければならぬのである。」(p. 13)と警戒を呼び掛けている。青山(1979)もまた「挿入されているものである以上、月報の刊記は本の奥付にしたがうべきであろう。」(pp. 16-17)と、谷沢寄り

<sup>37</sup> 更に踏み込んで個々の月報記事の転載状況を追跡・把握しようとするのであれば、筑摩版の各全集について月報細目を作成し、横断的に索引化する作業が必要になってこよう。

<sup>38</sup> 例えば、新潮社の『新版世界文学全集』(1957～60)では、月報に不正確な号表示が見られるばかりか、所属巻や発行年月や出版社名が全く表示されておらず、それはいささか横着が過ぎると思われる。

のスタンスに立つ。但し、再刊や再編成に伴って本体の発行日が改まるのに連動して月報の刊記も変更される場合が多いことは上述した通りで、再刊本の奥付に頼るだけでは月報の初刊発行日を確認し損ねることになりかねない。

何しろ誤植も多く、融通無碍なのが月報なので、一筋縄ではいかない（極端な）事例もある。数頁前に言及した筑摩版『現代日本文学全集』の「月報 98」の刊記にある 1959 年 4 月は、それを挿み込んでいる本体『別巻 1 現代日本文学史』（1959 年 4 月 30 日）の奥付通りであるが、この「一致」は間違っているのである。何冊か入手して確認したが、「月報 98」は 7 ヶ月前に発売された『別巻 2 現代日本文学年表』（1958 年 9 月 25 日）に既に挿み込まれていた事実が優先されるべきで、「月報 98」の刊記は『別巻 2』の発行日にこそ「一致」されるべきであろう。<sup>39</sup>

次に要心すべき問題は、本体の書名が期待させる内容を挿み込まれた月報が反映していないズレで、戦前の全集にはとても多く見られた現象である。態々手間を掛けて月報を挿み込もうとする背景には、購読者を次回配本に惹き付けようとの思惑が働いたのであるから、殊に発生期の月報では次回配本巻へのアピールに編集の主眼が置かれていた。現代の月報に馴れている読者は、本体の書名が月報の記事に反映されているのが当然と思いがちであるが、戦前の月報を捜す際には、目指す主題の巻より手前の配本巻を捜す心積もりでないと肩透かしを食わされかねない。例えば、③の第 57 巻は『小泉八雲集・ラーファエル・ケーベル集・野口米次郎集』（1931 年 12 月 18 日）で第 62 配本であるが、月報に八雲に関連した記事を読もうとするのであれば第 61 配本の第 52 巻『宗教文学集』（1931 年 11 月 22 日）に挿み込まれた「文学月報 59」を捜しに行く必要がある。もっとも 61 回とか 52 巻とか 59 号とかの数字に辿り着くにもそれなりの努力を覚悟しなくてはならない。図書館の OPAC は各巻の配本回を

<sup>39</sup> 『別巻 2』の発売が先行して、『別巻 1』用の「月報 98」が転用されたと筆者は推測する。

教えてくれないからである。幸いなことに、<sup>3</sup>の「文學月報」なら青山（1990<sup>3</sup>）が復刻してくれているので、巻末の「巻別配本順と刊行年月日」から目指す月報に直行できる。もっとも、青山（1990<sup>3</sup>）というツールの存在を予め識っていれば、の話ではあるが…

しかし月報を探索する場合、大概是図書館や古書店を手当たり次第に捜し回る破目になる。月報の号次は配本順に振られてはいるが、谷沢（1974）が嘆くように、「月報が挿入されてあつた巻を探し出すには各巻が第何回配本であるかを知らねばならぬが…配本回数を必ず函にのみ記して書物自体には絶対に記載しない」のに、ほとんどの図書館が函を破棄してしまうので、「配本順を一目で知る事ができない」のが常態になっている。<sup>40</sup> しかも複数巻が同時配本されれば本体の配本済巻数 $\geq$ 月報の号数となり、見込みを付けた本体の巻次 $\rightarrow$ 配本回 $\rightarrow$ 月報の号次への繋がりが保証されているわけではない。やっとな必要な本体に辿り着けても、今度は正しい月報を挿み込んでいなかったという笑えない展開も図書館の蔵書や古書店の商品には起こり得ることを、筆者は自らの経験を踏まえて付言しておきたい。

タイトルに多様さが無いのも月報特有の問題を引き起こすであろう。同じ「△△全集月報」となっているも、現物を並べて突き合わせてみると、（フットワークの軽い月報であってみれば当然なのであるが）ゆるがせにできない変更や発見が隠れていることがある。全集が再刊されて、月報の一部またはすべての記事がさり気なく差し換えられていたり、別の月報から記事が転用されていたりしても、それが購読者に改まった断りも無く（silently）なされる場合もあり得るからである。

同じ全集の重版でもそれほど年月を経っていない場合には、月報が新編集になっても見逃されることがある。例えば岩波版第五次『芥川龍之介全集』

---

<sup>40</sup> 筆者（藤井）が所蔵する範囲で確かめたら、約3分の1の全集で奥付ないしはジャケットに配本回が表示されていたから、谷沢の慨嘆には修辭的な誇張も含まれている。

(1995～98) は、10年後の第2刷(2007～08)で月報が新編集の「第2次」になったが、CiNiiは把握していないようである。2009～11年の岩波版『荷風全集』も1992～95年版の改版でなく第2刷でしかなかったが、新編集の月報に「第2次」とだけ表示されている。筑摩書房の『太宰治全集』では、1955年10月～56年9月版『全集』の月報と、1957年10月～58年9月版『全集』の月報とが別編集になっている。ところが1962年6月～63年2月版の『定本太宰治全集』では、1955年版から24本の記事を、1957年版からは6本を拾い、新稿を2本加えて全12号の月報に再構成することで、あたかも月報が新稿に改まったかのように仕立てられている。<sup>41</sup>

日常的に視野に入りながらも注目されることの少なかった「月報」は可能性を潜ませた興味深い資料の宝庫なのであるが、読み散らすにも、参照するにも、初出を確かめるにも、何かと手こずらせる素材でもあることを、以上のような問題のケースを通して概ね示すことができたであろう。以上を踏まえて、筆者は「月報」をめぐる（やや妄言的な）提案を最後にさせて頂きたいと思う。

そもそも月報は独立した出版物ではないから、ISBNやISSNが振られておらず、書籍としての改まった管理が意識されていない。本体との結び付きが希薄なので改稿や差し換えも容易で、内容に柔軟性や情報に速報性を発揮できる。それだけに玉石の記事が混在しがちであり、改稿の履歴も不明瞭のまま放置され易い。形態的にも散逸を招きやすく、書誌的に十分な把握がなされてきていない。よって利用の便が極めて悪く、国会図書館が自館所蔵の月報にいちおうの整理を付けて目録の公刊に漕ぎ着けたのは、月報が流行し始めてから70年は経った1996年になってのことであった。『国立国会図書館所蔵 全集月報・付録類目録』の「はしがき」には、

<sup>41</sup> 筑摩書房版『太宰治全集』別巻(1992年4月24日)所収の「参考文献目録」は詳細で、その「IV 付録・月報・パンフレットの類」(pp. 624-642)から得られた情報を利用した。

…昭和 23 年の開館以来、参考書誌部（現専門資料部）において、参考業務を補完するためこれら月報類を収集・管理し、利用に供してきたが、タイトル数も 2,500 を超えたことに鑑み、合冊製本・受入・整理を開始し…

とあって、「凡例」にも 1994 年 1 月までに完結した全集を対象に添付の月報を目録化したと明記されている。更に同館のホームページに拠ると、2001 年 7 月以降に受け入れられる月報については合冊に製本する管理法を改めて、各巻の本体に月報を貼付するよう方針変更をしたらしい。そうなると冊子の破損や紛失の危険は募り、月報のために一々本体込みで借り出す手間が増えるが、月報が完結するまで未製本状態に死蔵される心配は無くなるし、本体巻次と月報号次の対応関係も比較的明瞭・緊密に保たれるであろう。

但し一利用者として、国会図書館による月報の管理に対する理解不足の不安を拭い去れない。すなわち、移行期（1994 年 2 月～2001 年 6 月）の月報は異なる保存システムの間で泣き別れにされるのか。それとも二様に保存されているのであろうか。新方式での月報の所蔵情報が OPAC を通して逐一提供されるのであろうか。OPAC で月報の内容が本体並みに詳述される見込みは今後においてあろうか。等々が気になってくるのである。

国会図書館は昭和 23 年に帝國図書館の遺産を引き継いだことになるが、その時点で既に月報が大量発生し始めてから四半世紀も経過していた。帝國図書館が月報各冊の保存状況を網羅的にチェックして、欠号分を計画的に補充してきたとは期待できない。後継の国会図書館においてもまた然りである。国会図書館の OPAC で「月報、というキーワードを添えて検索すると、所蔵する月報の号についての情報と（それ以上に多い）欠号の状況は臆気ながら判るが、それでもこれまでに制作発行されてきた月報の実態をどこまで反映させているのかを推し測る術は無い。本体巻との関連や月報の細目も表示されていない。

ということは、どこの図書館でも月報の把握状況においてはこのレベルで大

差が無いと想像される。つまり予め具体的見通しの付いている月報記事であれば、国会図書館のレファレンス・サービス係に書誌情報を問合せ、回答を得たうえで所蔵先に複写サービスを申し込むという手順を踏むことになる。ところが、情報の乏しい記事の探索や掘り出し物を期待しての拾い読みでは国会図書館の手援けは得られない。それほどに月報を活用する態勢が整っていないということなのである。

発行部数が多くて残存数を比較的期待できる月報のうち、例えば③「改造社文學月報」、④「世界文學月報」、⑥「世界戯曲全集編輯たより」、⑦「近代劇全集月報」、⑧「春陽堂月報」などは五月書房により復刻されて、各地の図書館に導入されているようであるが、出版社が算盤を弾いて復刻するタイトルに頼っているのは、知名度の低い少数派の月報は、（幸いに残っていたとしても）置き去りにされて、次第に塵と化してしまうであろう。

そこで「シロウトが言うだけなら容易いが…、と反撥を招くのを承知のうえで、月報の収集→整理→保存→活用を推進するために、一介の利用者としての思い付きを提案したいのである。これは中西・加藤（2011）が四国の図書館に月報管理の現状を実地調査した結果を踏まえて示した提言にも通ずる。すなわち、保存方針を現場に周知させ、欠号補充に努める必要とともに、

…県立図書館等が音頭を取って月報類の横断的データベースを整備することも望まれる。さらに論文データベースや雑誌記事索引のように記事1本1本のタイトルや著者名によって検索可能なデータベースを整備する必要もあるだろう。（p. 65）

という趣旨の提案であった。しかし県境を越えない地域的整備では二度手間、三度手間になって効率が良くないし、継続性でも先が見通せない。追いかける様にして発表された Williams（2013）にしても、各地の図書館から書誌情報

を集めたデータベースを構築して研究者に公開するプロジェクトに言及しているのであって、恐らく（太平洋を跨いでではなくて）州境を越える規模に留まった図書館相互での共同作業を想定していたであろう。

国会図書館の本来の利用者である国会議員は古い〴〵月報、なぞ読まないかも知れないが、日本でならばやはり国会図書館が〴〵国立、の威信に掛けて〴〵専門資料部、なり月報整備の部署なりを用意して受け皿役を買って出るべきではないか。そしてそこでの最初の作業として、月報発生期から昭和23年まで、およびそれ以降に発行された月報類の保存状況を号単位・頁単位で精査して<sup>42</sup>、所蔵するものとししないものの詳細な目録をネットで順次公開して補充のための協力を仰ぐというのはどうであろうか。とはいっても、Williamsが提案するように図書館業界に限定して書誌データを収集するだけでは限界もあろうから、月報を制作した出版社はもちろんのこと、個人の所蔵先や古書店に幅広く訴えて情報の提供を求める必要がある。ボランティア精神では成熟しつつある日本のことであるから、文献類の蓄積では公共施設に劣らない民間の善意と能力に多くを期待できると思うのである。

所蔵者に情報の提供を呼び掛ける手順としては、先ずネット上に受信用の窓口を常設して、書誌情報を報告してもらうための共通フォームをネットに公開する。情報が寄せられたら窓口で専門家が迅速に検証し不備があればデータの追加や再送を依頼できるように、協力者との間に信頼関係を築き上げていく日常的な努力も欠かせない。そのようにして得られた情報は整理されてリアルタイムで欠号リストに反映されるべきであろう。

もちろん上述の作業と併行して、国会図書館の側にも所蔵する月報の全頁を順次デジタルデータ化して公開するくらいのサービス精神を発揮して欲しい。欠号頁の補充についても、デジタルデータでの提供を博く呼び掛ければよい。

---

<sup>42</sup> 版元に問い合わせたり、最近ではネット上の〴〵日本の古本屋、が月報や附録の有無をかなり捕捉して出品目録に表示しているので、検索すれば挿み込み状況がある程度掴める。

最近ではスキャナーが普及したために、家庭で簡単に pdf ファイルを「自炊」できるようになったから、解像度などの規格が予め定められていればデータの汎用性も確保されるであろう。<sup>43</sup>

果たしてこうした試みが著作権法から制約を受けるものなのか、あるいは良識に基づく楽観の見通しで通用するものか、法律の条文に馴染みが無い筆者には判らない。そこがシロートの思い付きと下手に出て提言している所以である。ちなみに時実象一（2015）を読んだときに、2009年の著作権法改訂で著作権消滅以前の著作物でも国会図書館が職権でデジタル化できるようになったらしいことを知ったのであるが（p. 175）、それを国会図書館の特権に留めて、情報を提供してくれるかも知れない民間の善意を排除してしまっただけでは如何にも拘子定規な運用になってしまおう。

著作権を振りかざして月報の収集・保存に異議を唱えたり実害を訴えたりしてくる者が居ても、それは特別な事情がある極く少数に留まるであろう。心を籠めて月報に執筆した人間なら自分の文章が文化遺産の一部として保存されるのをむしろ慶ぶはずで、そう期待することこそが良識であり自然の理というものである。著作権法が文化の保存と公開を妨げるとは考えにくいのであるが、善意の所蔵者からデジタルデータ化された月報頁の提供を仰ぐためには、受け皿となる機関に融通を利かせた法律の運用を検討して欲しいし、デジタル化に伴う何らかの法的手続きが必要になれば、その手間は情報提供者の側ではなく情報を管理・保存する側が率先して引き受けるべきであろう。

こうしたデータベースを構築して維持するためには、管理者の側も手厚い情報提供を標榜して、誰にでもどの月報でも何頁でも閲覧できる態勢を用意してもらいたい。例えば現行の「国会図書館デジタルコレクション」を介して月報

---

<sup>43</sup> 書籍の破壊に憂鬱する者も綴じられていない月報なら気軽にスキャンできよう。窓口になる機関（例えば国会図書館）からスキャニング用のアプリケーション・ソフトが配信されれば、設定の手間も掛からず解像度を含めた共通規格が将来的に定着しよう。

の閲覧・ダウンロードできるようになれば、協力してきた個人が今度は利用者として見返りを得ることになって、善意の協力者との間に友好的なギブ&テイクの関係が安定的に築かれるであろう。各地の多忙な図書館員も巡り巡って受益者になり得ることを実感できるし、見識のある古書店ならば蓄積してきた知見や在庫から得られた情報を出し惜しみしないであろう。<sup>44</sup>

そのための態勢が維持されれば、これから世に送り出される（書籍並には見られていない）月報類も網羅的に収集され、書誌的に記述され、保存され続けるであろう。過去の月報についても冊子毎の内容情報で密度を高めていく作業が自ずと進められるであろう。何しろ月報には、縷々述べてきたように、書誌的曖昧さがつきまとうので、どんな記事が何時何処に初めて掲載されたか、再録状況は、改稿の履歴は、といった詳細については一冊の月報を睨んでいるだけでは何時まで経っても解明できないからである。

それで、月報の入手に苦労した経験のある人間ならば、収集された月報から執筆者名～記事名～掲載先その他の情報を取り込んで更新される、例えば現在ネット上にあつて筆者も重宝している『研究余録～全集目次総覧』のような、いや、もっともっと詳細な『月報細目』の実現を切望するはずである。そして将来に月報の全頁が順次デジタル化され公開されれば、本文検索を横断的に実行できるようになるであろうし、（協力態勢が更に緊密になって）より多くの全集や叢書類で『月報細目』が精力的に作成されるようになるであろう。そして掘り起こされた月報から諸々の情報が読み出され、『月報』という従来は不安定であった文書が文献として活用されるようになるであろう。

---

<sup>44</sup> 月報無しで嵩張るばかりの在庫を抱えてきた古書店にとっては、月報に関する情報が公開されれば、商品価値を底上げできることになる。

## 関連文献（抄）

- 青山毅（1978）『『明治大正文学全集』について』『ブックエンド通信』 青山毅（全号を編集） 第1号 市川市：私家版 1978年12月28日 pp. 18-30. 【再録】：青山（1985）pp. 50-67. 青山（1990<sup>2</sup>）pp. 54-67. 青山（1989）pp. 362-369.
- （1978<sup>2</sup>）「月報と私」『ブックエンド通信』 第1号 市川市：私家版 1978年12月28日 pp. 38-39. 【再録】：青山（1985）pp. 374-376.
- （1979）「新潮社版円本『世界文学全集』について」『ブックエンド通信』 第3号 市川市：私家版 1979年8月17日 pp. 3-17. 【再録】：青山（1985）pp. 104-114. 青山（1990<sup>2</sup>）pp. 138-146.
- （1979<sup>2</sup>）「文学全集と私」『ブックエンド通信』 第3号 市川市：私家版 1979年8月17日 pp. 42-43.
- （1979<sup>3</sup>）「山本実彦と『現代日本文学全集』の誕生」『ブックエンド通信』 第4号 市川市：私家版 1979年12月28日 pp. 23-31. 【再録】：青山（1985）pp. 68-80. 青山（1990<sup>2</sup>）pp. 25-35.
- （1980）「新聞と私」『ブックエンド通信』 第5号 市川市：私家版 1980年4月25日 pp. 68-70.
- （1980<sup>2</sup>）「花袋全集月報、文庫本、全集のことなど」『田舎教師研究』 第4号 羽生市：田舎教師研究会 1980年9月23日 pp. 55-59. 【再録】：青山（1985）pp. 310-320.
- （1984）「新潮社刊『現代長篇小説全集』とその附録《長篇小説月報》」『ブックエンド通信』 第9号 市川市：私家版 1984年9月3日 pp. 2-18. 【再録】：青山（1985）pp. 81-103. 青山（1990<sup>2</sup>）pp. 77-94.
- （1985）『総てが蒐書に始まる』 青英舎 1985年11月16日.
- （1987）『『新興文学全集』内容見本』『図書新聞』 第572号 古書新聞社 1987年12月12日 第3面. 【再録】：青山（1989<sup>2</sup>）pp. 109-113. 青山（1990<sup>2</sup>）pp. 204-208.
- （1989）『春陽堂月報』 青山（編） 五月書房 1989年12月8日（昭和文学思想文献資料集成 第3輯） 48,000円+税. 月報執筆者の索引、「巻別配本順と刊行

年月日」および青山（1978）を併載。

———（1989<sup>2</sup>）『古書彷徨』 五月書房 1989年3月27日。

———（1990）『世界文学月報』 青山（編） 五月書房 1990年4月8日（昭和文学・思想文献資料集成 第4輯） 48,000円＋税。 月報執筆者の索引、「巻別配本順と刊行年月日」および解説を付す。

———（1990<sup>2</sup>）『文学全集の研究』 青山（編著） 明治書院 1990年5月25日 4,660円＋税。 「十三点の月報細目を取りあげることが出来た。おそらく、戦前発行された、総合的な文学全集の月報は…ここに網羅することが出来たであろう。」（p. 247）。

———（1990<sup>3</sup>）『改造文学月報』 青山（編） 五月書房 1990年6月8日（昭和文学・思想文献資料集成 第5輯） 48,000円＋税。 月報執筆者の索引、「巻別配本順と刊行年月日」、山領による解説を付す。

———（1991）『近代劇全集月報』 青山（編） 五月書房 1991年3月28日（昭和期文学・思想文献資料集成 第10輯） 48,000円＋税。 「近代劇全集総目録」、月報執筆者の索引に解説を付す。

———（1991<sup>2</sup>）『世界戯曲全集編輯たより』 青山（編） 五月書房 1991年3月28日（昭和期文学・思想文献資料集成 第11輯） 48,000円＋税。 月報執筆者の索引および藤木による解説を付す。

石渡裕子 「冊子目録落穂拾い」『参考書誌研究』 国立国会図書館専門資料部（編） 第47号 国立国会図書館 1997年3月15日 p. 97。

『岩波書店八十年』 岩波書店 1996年12月20日。

『圓本全集販賣目録：改訂昭和十一年版』 大觀堂書店 1936年3月1日。 国立国会図書館デジタルコレクション、から閲覧・印刷ができる。

木村毅 「36円本旋風の起原」『私の文學回顧録』 青蛙房 1979年9月10日 pp. 357-369。 【付記】：昭和女子大学近代文学研究所の『学苑』第434～477号（1976～79）に掲載された「投書人生歷程記（1）～（30完）」に書き継いだもの。

『国立国会図書館所蔵 全集月報・付録類目録：Catalog of Explanatory Inserts for Serial Publications』 国立国会図書館（発行）/ 紀伊國屋書店（発売） 1996年12月27日。

『春陽堂書店発行図書総目録（1879～1988年）』 春陽堂書店 1991年6月30日。 大震災と戦災で社屋その他を焼失して、社史をまとめるにも資料が残っていなかった

ので、今日に至るまで社史は無い。

『小学館五十年史年表 1922年～1972年』小学館 1975年8月8日。

『新潮社100年図書総目録』新潮社 1996年10月10日。

瀬沼茂樹 「円本合戦」『本の百年史：ベスト・セラーの今昔』出版ニュース社 1965年9月25日 pp. 171-196. 【初出】：「ベストセラー繁昌記：三代出版文化史」『週刊読書人』日本書籍出版協会 1960年1月1日～1961年4月24日（連載57回）。「…思いきり補正し、前篇にわたって書き改めた」（1965年，p. 336）ということなので、初出では参照しなかった。

『漱石全集月報 昭和三年版・昭和十年版』岩波書店 1975年3月10日。 「昭和三年版」 pp. 3-170. 「昭和十年版」 pp. 173-390. 「目次」 pp. [1]-[3]. その後『昭和四十年版』（岩波書店，1985）も刊行されている。

曾根博義 「『新日本文学全集』と戦争下の出版状況」『ブックエンド通信』青山毅（編著）第6号 市川市：私家版 1980年9月3日 pp. 25-36. 【再録】：青山（1990<sup>2</sup>） pp. 106-118.

高島健一郎 「商品としての円本：改造社と春陽堂の比較を通して」『日本出版史料』日本出版学会・出版教育研究所（共編）第9号 日本エディタースクール出版部 2004年5月 pp. 20-37.

谷沢永一（1974）「文献目録編纂覚書」『日本古書通信』第39巻10（通号366）号 日本古書通信社 1974年10月15日 pp. 12-13. 【再録】：『谷沢永一書誌学研叢』日外アソシエーツ 1986年7月10日 pp. 244-245. 谷沢 『書誌学的思考』大阪：和泉書院 1996年1月15日 pp. 650-655.

———（1974<sup>2</sup>）『署名のある紙礫』大阪：浪速書林 1974年11月3日。

———（1978）「『春陽堂月報』第二十九号」『読書人の園遊』桜風社 1978年10月20日 pp. 101-103. 【再録】：『谷沢永一書誌学研叢』日外アソシエーツ 1986年7月10日 pp. 344-345. 谷沢 『書誌学的思考』大阪：和泉書院 1996年1月15日 pp. 284-286.

———（1979）「『春陽堂月報』回想」『ブックエンド通信』青山毅（編著）第4号 市川市：私家版 1979年12月28日 pp. 32-36. 【再録】：青山（1990<sup>2</sup>） pp. 49-53. 谷沢 『書誌学的思考』大阪：和泉書院 1996年1月15日 pp. 278-283.

———（2003）『日本近代書誌学細見』大阪：和泉書院 2003年11月25日。

『筑摩書房図書総目録：1940-1990』 筑摩書房 1991年2月8日。 書名，発行日，配本順，再編成の経歴，月報の有無なども記されている。

時実象一 『デジタル・アーカイブの最前線：知識・文化・感性を消滅させないために』 講談社 2015年2月20日(ブルーバックス)。

中西裕・加藤美奈子 「公共図書館における全集月報類の保存と整理に関する調査研究」 『就実表現文化』 就実大学表現文化学会 第5号 2011年1月 pp.80-64。

『日本近代文学大事典』 日本近代文学館(編) 全6巻 講談社 1977年11月18日～1978年3月15日。 第4巻に「月報」項 (p.139)。また第6巻(1978)の「叢書・文学全集・合著集総覧」(pp.1-132)は，1945年までに刊行されたシリーズ物を書誌的に略述していて参考になる。

藤木宏幸 「『世界戯曲全集編輯たより』解説」 青山(1991<sup>2</sup>) 所載 pp.373-383。

『平凡社六十年史』 平凡社 1974年6月12日。 尾崎秀樹執筆。

山領健二 「『改造社文学月報』とその読者」 青山(1990<sup>2</sup>) 所載 pp.16-24。 【再録】：青山(1990<sup>3</sup>) pp.593-601。

森茉莉 「『半日』」 『現代日本文学全集 第7巻：森鷗外集』 筑摩書房 1953年11月5日 月報3, pp.5-8。 但し，『森鷗外集』は1967年と1973年の再刊では本体が第12巻に，月報が第12号に変更されている。

Williams, Michael P. “Deepening Scholarly Access to Geppō: Toward a Collectively-Contributed Article Citation Database.” *Journal of East Asian Libraries*. Vol. 2013. No. 157. Pp. 1-22.

(2018年12月10日脱稿)